

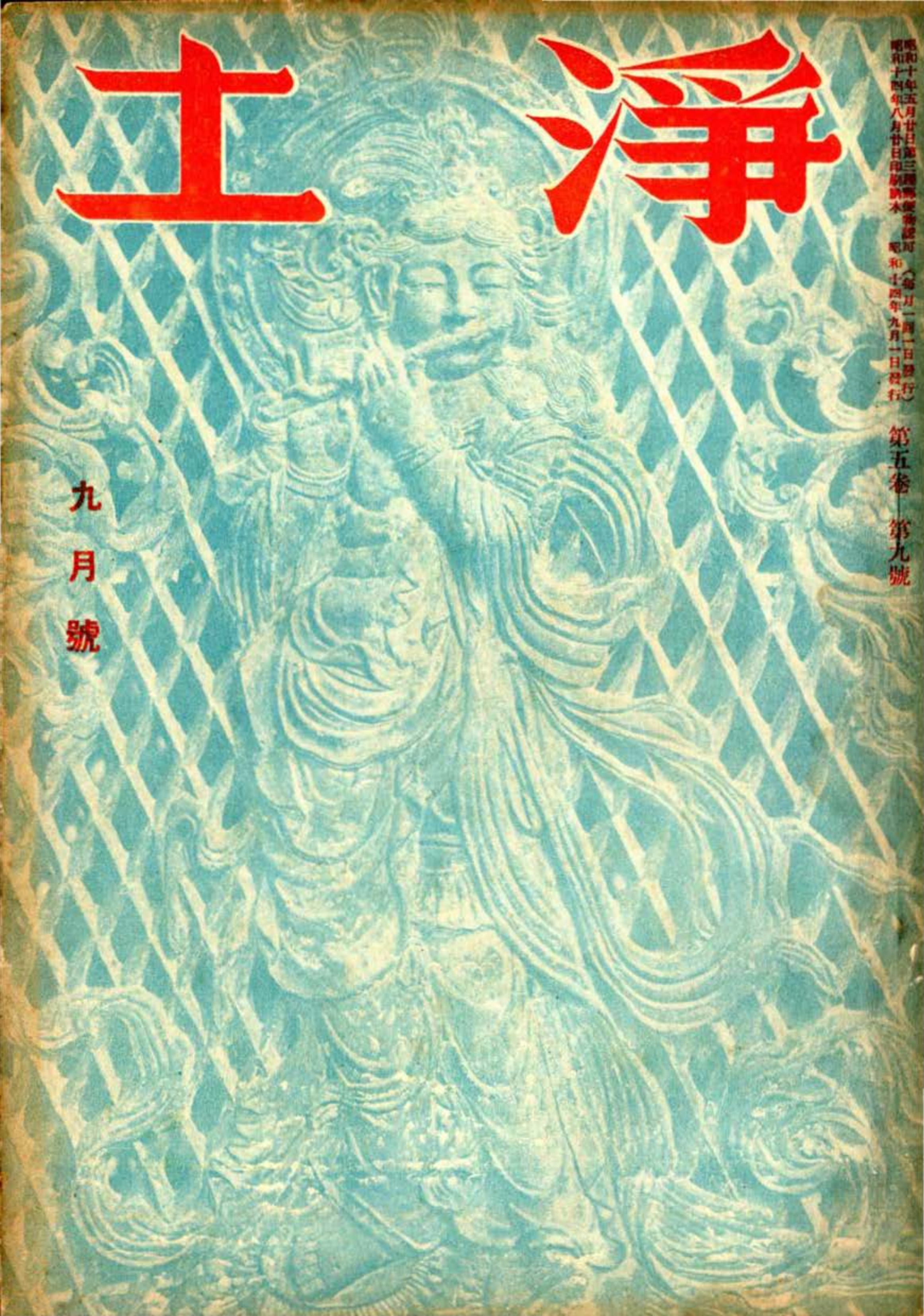
淨

土

昭和十四年五月廿日第三種郵便物認可
昭和十四年八月廿日印刷
昭和十四年九月一日發行

第五卷 第九號

九月號



◇仕奉後銃・久持忍堅◇

◎一圓の淨財・一年の慰問

君國のために身命を堵した白衣の勇士達は今や到る處に戦傷を癒し、病苦を養ふておられます。これ等の方々に心の糧として吾等が誇りとする、信仰の伴侶雑誌「淨土」を贈つて法味を愛樂して頂かうと思ひます。何卒この聖なる運動に速時參加して下さい。

病院
慰問

白衣の勇士に法味を捧げよ

◇全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至五十部の雑誌「淨土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げた
いと存じます。

◇御一人一圓の淨財を御喜捨下さい。一年間毎月雑誌が病院へ参ります

◇毎月五千部は是非入用です。五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。

◇個人でも、團體でも、亦金高が一圓以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。

◇御送金は淨土宗務所事務部宛に！領收の證には宗報誌上に御芳名を掲載します。

◎一冊の淨土・一生の歡喜

理研製品



過勞が續くと
危険です……

忙しいと無理をする、無理が續くと疲れる、身體も精神も倦怠する、何かの拍子にすぐ病氣にやられる、殊に結核や肋膜炎が起る。だから多忙な人はゼヒ精力の補充が必要です。常によい栄養の豊富な攝取が必要です。

抵抗力減退を
防止します……

ビタミンAとDは、日本人の食物中に少い栄養であり、殊に新陳代謝を促進し又病氣に對する抵抗力を強化する栄養であるので、過勞勝ちの人には健康保持の爲に「理研ビタミン」毎日二球づゝの常用が推奨されます。

一球に七七〇〇國
際單位—鰵肝廿五
個分のビタミン
Aを含有します。

帝國學士院賞受領

過勞に
理研
ヴァイタ
ミン

四〇球…二圓 一〇〇球…五圓 藥店にあり

總代理店



株式會社 玉置商店



◆ 浄土 第五卷 第九號 九月號 目次 ◆

表紙
扉
東大寺大佛殿燈籠透彫「天人散華」
齋藤清

阪根翁のこと……………吉田絃二郎(六)

中支風物……………須賀隆賢(一〇)

廬山遊記……………服部覺善(一六)

支那佛教の狀勢……………福田闡正(二六)

北海道を巡講して……………佐藤賢順(三二)

戦争と佛教……………植村諦聞(四二)

大陸だより……………長谷川良信(五六)

明日と青年……………栗原美能留(四四)

人間漫語……………三木武夫(四四)

信仰相談……………中村辨康(四四)

名士隨想

大陸往來

隨筆淨土

皆い、事！……………中野尅子（美）

一心淨土……………生田花世（元）

召集令……………坂本節子（量）

漫畫新版やくざ道中……………大羽比羅夫（三）

小說山（やまかけ）……………平郡一郎（八）

短篇子煩惱……………小林正一（四）

童話「五二七號」のバス……………高橋良和（哭）

俳壇……………太田耳動子選（七）

歌壇……………與謝野晶子選（望）

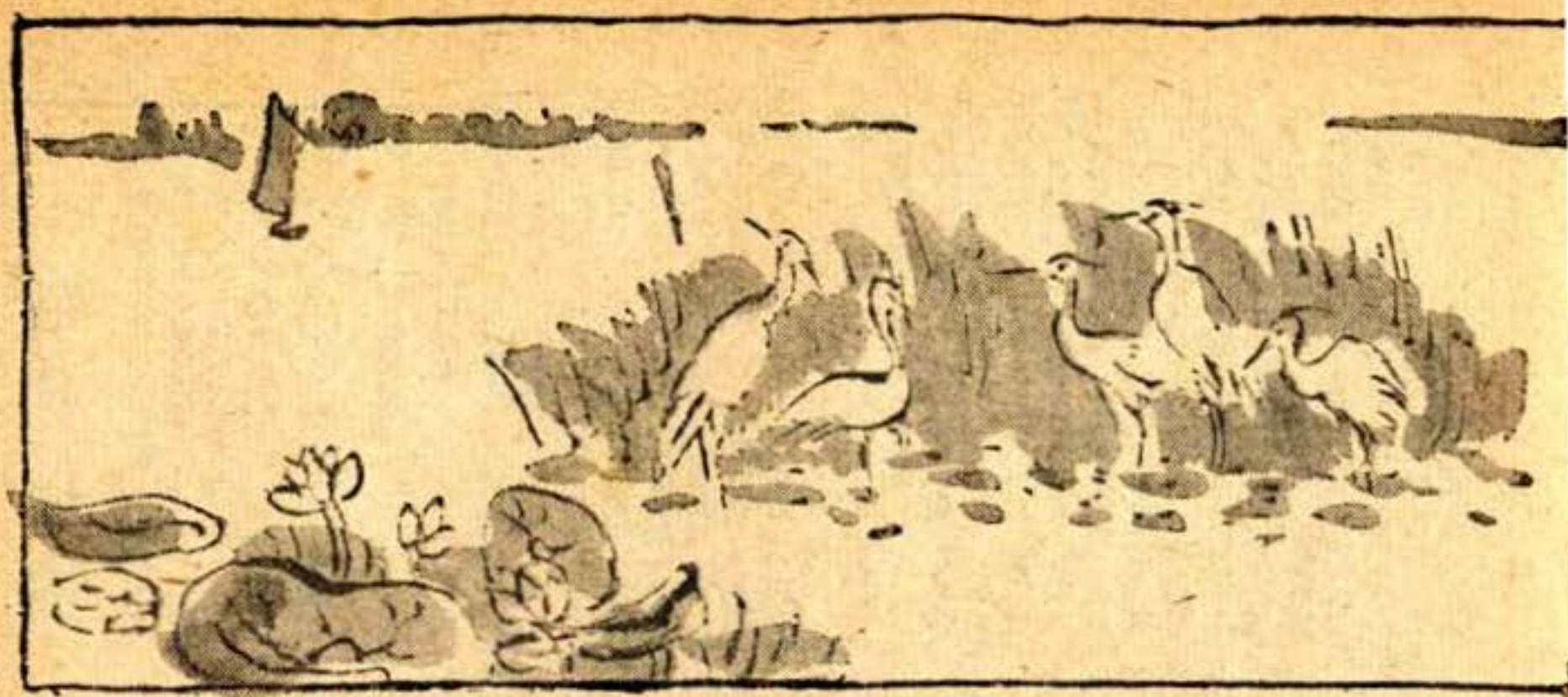
日常動行式解説 信仰の培養素……………中村辨康（天）

鑽仰運動ニュース……………（美）

本會總裁及び役員發表……………（四）

編輯後記……………（空）

◇淨土 第九卷 九月號 目次◇



本會總裁及び役員

去る七月廿八日の理事會で左記の如く本會組織始め役員を決定され御承諾を得ましたので發表致します。

總裁

望月信孝 大島敬水 加藤鏡心

副總裁

里見達雄

會長

中村辨康

理事長

常務理事 廣野正順 江藤敬英 藤本了

理事

岩野眞雄 長谷川良信 高瀬承嗣 杉浦演順

相談役

大宮智榮 大島泰信 大村桂樹 石塚龍男

相談役

鈴木在念 山口泰常 推尾辨匡 岡本貫玉

相談役

竹石耕善 宮下舜達 野上運外 林達明 大

相談役

林瑞祥 飯尾辨重 小林則達 六花眞哉 小

相談役

山頭翁 川端信之 吉武勇雨 久家慈光 森

相談役

川旭丈 田村智學 小田信盛 渡邊眞海 森

相談役

眞野 芳井敦洋 高根豐成 吉田統二 中

相談役

里介山 立石敏一 石井通博 佐藤春夫 和

相談役

田正系 南條徳男 山本厚三 高橋順次郎

相談役

佐藤興一 鈴木辰三郎 助川啓四郎 北原阿

相談役

智之助 風見章 川島正次郎 綾部健太郎

相談役

山田又司 町田忠治 濱田國松 高橋三郎

中島知久平 岡本實太郎 中村又一 八角三

郎 作田高太郎 小山邦太郎 植村嘉三郎

太田信次郎 駒井重次 松岡俊三 松村光三

喜多壯一郎 飯村五郎 鈴木五郎 木田英作

宮田等平 勝正憲 最上政三 藤生安太郎

中野邦一 小高長三郎 小串清一 今井新造

深澤豐太郎 長井源 松田正一 伊藤東一郎

青木亮賢 池木其四郎 北浦圭太郎 一松定

吉 前田房之助 田中源三郎 安部寛 小林

房之助 山川頼三郎 西村茂生 國光五郎

西川貞一 倉成庄八郎 西岡 竹治郎 小見

山七十五郎

評議員 戸松學瑛 照井隆善 宮原祐山

久松瑞瑞 五島法住 河原秀孝 矢口圓海

立川圓月 石川覺純 大谷在常 藤井兼傳

岩瀬豐英 三井諦心 小島靜知 中島義訓

山本念哉 笠島 大瀧 松澤舜道 石上教思

久米 原脩丈 吉水智承 神谷眞榮 加藤諒

進 藤田立信 淺井法隆 間宮靜悠 川添豐

道 福住孝賢 寺西龍學 西尾得賢 横井信

道 福本順敬 西村直道 福井隆我 大橋廓

道 細井照道 岸田宏玄 佐伯俊哲 見山任

達 千々和實天 裏辻倫道 西村常純 田代

民道 結城文雄 轉法輪行念 池田常然 菱

田 野大徹 齊藤典泰 大島翔信 田中隆善 河

山 山明道 常川忍微 高橋元翁 南澤善立 小

川 川隆鏡 津田弘岡 鈴木源承 戸田見我 森

山 山實應 富田辨聰 鈴木泰範 大町善瑞 信

夕 原良哉 阪口祐廣 三枝樹實道 藤谷智

足立俊雄 時田得壽 二階堂直海 中野典章

細川立道 大島彦信 廣島教信 加藤と志

齊藤典泰 高野海音 石井英亮 和田良順

相川大藏 島田大梁 大日方大忍 大久保竹

次郎 島野順祥 三輪樹林 阪本義學 佐賀

一海 宮田廣導 大河内隆弘 田丸徳成 橋

口徳賢 橋本樂榮 下原秀定 福西輝光 生

野善壽 橋本法道 高山機松 岡田謙三 武

田了範 松村眞道 水田良雄 林眞顯 古賀

博 堀川大我 藤井了哉 中瀬瑛順 坂本圓

應 西村隆海 井原文雄 草野顯照 見山任

遠 池田卓然 三谷忍輝 田中哲明 上野法

雄 坪田隆賢 光岡昇雲 田代リウ子 鈴木

豐源 宮本玄哲 丹羽眞誠 八尋潤光 宇佐

美光賢 小野潤雄 橋本賢祐 江上秀郎 佐

藤馬士 堀實雄 野中圓都 森下孝道 中園

宏願 清瀧政人 志岐眞成 長尾智道 三宅

春光 清水寂圓 龜山俊岡 松村直道 上野

法雄 杉山碩翁 齊藤大梁 鶴田法親 奥添

觀現 田原典了 千野定勝 佐々木教康 島

津登也 竹内耕倫 永塚常全 石上皆顯 花

田 順住 野村定賢 英泰憲 百目木隆英 大

谷 錦忍 平井善慈 飯島覺道 藤井正亮 松

開瑞玉 工藤辨山 長尾亮導 開米全了 成

田 聖淳 佐藤亮英 和泉順道 奥角信靜 赤

平寬導 菅原千秋 岩崎法城 鬼海正道 武

田 直隆 小川金英 細野敬隆 藤澤寺 伊澤

正信 森貞雄 伊藤法龍 宮本隆實 渡邊眞

戒 宮澤善正 國松俊倫 梅原善苗 四柳龍

松壽在龍 水野了勝 小笠原光子 藤本學導

辻重光 溝口よし 稻徳源二 岡本空丈 三

池信泰 大河内秀天 山田信鏡 牧野清水

宮田誠道 隈部正雄 中野隆元 八百谷孝保

岡本實榮 木村良祐 赤尾光雄 原善久 渡

邊了道 荒津市次郎 大河内隆弘 池村觀淨

小侯眞誠 茂田良賢 岡本秀華 中島眞孝

廣本敬隆 小野聖導 小林常盛 講淨信 戸

田 恭善 寺尾辨瑞 水谷辨知 石川良雄 吉

水智承 佐々木戒淳 荒川卓達 森本祐樹

豐田愛山堂 鹽重義隆 泰隆眞 三塚善雄

五島法住 泰善隆 北村乘雲 白道輝室 三

宅性隨 梨博良文 越野俊倫 大崎達道 三

枝樹正道 岩瀬眞現 田中興哉 西垣宏俊

三木大梁 神谷學周 三宅三造 松村清三郎

濱田賢道 吉田善輝 佐野慶運 藤崎我道

澤田德道 小島眞哲 村上大梁 中島智道

法澤見旭 名越隆成 上山文淨 宮谷幸輝

清水寂圓 木下繁雄 千葉專城 泉覺生 永

井立教 上野忠雄 荒谷勝義 武藤瑞雲 漆

崎定然 靜水賢純 黒川大道 田中龍定 深

谷達順 諸岡時善 南野諦賢 奥田善定 成

瀨宏忍 田中休蓮 伊藤隆法 藤谷哲道 淺

野辨眞 松野亮戒 白旗眞光 石川良宜 能

登芳隆 山田耕文 杉本眞理 八木善祐 杉

浦良善 八木琢成 小栗寛瑞 林聖英 吉原

寛樹 時岡法秀 金輪聖玉 野島宜道 平野

隆盛 上島徳恒 田村澄善 警尾隆輔 志野

隆則 高山龍天 高谷聖明 石橋信成 佐原

(以上)

淨土

九月號

阿彌陀佛にそむる心の

色にいては

秋の梢の

たくひならまし

法然上人詠歌



阪根翁のこと (二)

吉田 絃二郎

佛 佐 吉

阪根翁の生ひ立ちを考へると、すこぶるかの佛佐吉のそれに似たものがある。佛佐吉は今日の岐阜竹が鼻村の貧家に生まれた。今日でも竹が鼻村に立ち寄つた人たちは先づ村の道路の綺麗に掃除をされてゐることに驚くさうであるが、それは百餘年前にこゝに生きてゐた佛佐吉の感化である。佐吉は幼いころ父親に死別れ名古屋に奉公に出された。母親は賢い人で、佐吉を奉公に出すをり「お前が立派に主家に仕へて一人前の男として恥づかしくない人間となつたら家の閥を跨せる。自分のわがまゝのために先方様からお暇が出て歸つて来るやうだつた

ら、おつ母さんは逢はないよ」と一ひ聞かせた。佐吉は母の言葉を守つて主人にもとよなき奉公人として可愛がられたが、他の奉公人たちに嫉まれて主家を出なければならなかつた。

幼い佐吉は母と相談をして綿買ひをはじめた。しかし秤を買ふ金がないので、秤なしに綿を買ひ集めて來ては、また秤なしに綿を賣つた。人々は正直な佐吉を信用して賣買をしたので、佐吉の商賣は日一日と繁昌して行つた。世間並の商人であつたら、その儲けた金を資本にしてさらに金を殖やすことに苦心したのであらうが、佐吉はそんな商人とは本質的に異つた心を持つてゐた。佐吉は村の人たちのために橋を架けた。村の人たちはお禮の印にその橋の名を佐吉橋と名付けようとしたが、佐吉は堅く辭退した。

佐吉の話について思ひ出すのは幼いころの二宮尊徳翁の話である。貧しい金次郎は酒匂川の川原の隅に捨てられてあつた三坪か四坪の荒地を切り拓いて菜種子を植えた。そして幾何かの收穫を得た。金次郎はその收穫を賣り、その金で松苗木を購つた。

或る日夕刻になつても金次郎が歸つて來ないので、母親は案じながら門前に佇んでゐた。やがて金次郎は歸つて來た。そして遅くなつて、心配をかけたことを詫びながら母親に語つた。「實は毎年酒匂川の大水のため村の人たちが難儀をするので、川の岸に松苗を植ゑて來たのです」と。

佛佐吉にしても、尊徳翁にしてもわづか十二か十三歳の子供のところからかういふ見上げた尊い心がけを持つてゐた。そして一生涯を他人のため、世間のために盡した。阪根翁も亦佛佐吉や尊徳翁と同じやうに子供のころからその一生涯を人のため、世間のためにさゝげた人であつた。

人に捨てられて佛を見出す

阪根彌兵衛翁が生家を離れて阪根家の養子に入つたのは幕末の頃で、世間は倒幕攘夷の渦巻の最中にあつた。

阪根翁の父親もかの佛佐吉の母親と同じくまことに義理堅い人で、且また清廉潔白の人であつた。いよいよ少年彌兵衛が家を出ることになつた日、父は膝下に彌兵衛

を呼んで「お前はたしかにわしの子供であるが、今日からはわしを父と思つてはならぬ。阪根のお父様こそ誠のお父様だ。どのやうなことがあつても家に歸つて來てはならぬ。お前が阪根家を立派に繼いだ時、わしはお前に逢つて上げる。」と言つて懇々と少年彌兵衛を訓戒した。

ところで、その阪根家の養父といふ人が有名なかましやで、近所の人々の噂では、どんな男が養子に來ても到底おさまる氣づかひはないといふ程であつた。無論少年彌兵衛にしても世間的な辛苦の限りを忍んだことであらうが、辛いとも苦しいともかつて一度も訴へたことはなく、養父に對しては實子も及ばぬ程の孝養を盡した。

それ程の苦勞をしても、養父が亡くなつた時、彌兵衛翁に遺されたものといつては八千兩といふ莫大な養父の負債と、養つて行かねばならぬ數人の義弟たちであつた。時に翁は二十歳の若者であつた。

養父の病歿につゞいて不幸は不幸を招いた。かの維新のをりの京都の戦火である。すなはち鐵砲焼けである。八千兩といへば當時としてなか／＼の大金である。その上に戦火にかゝつて全焼の災禍である。たいていの青年

なら意氣沮喪して、成すところを知らず、恐らく實家に逃げかへるくらゐのところであらうが、彌兵衛翁の眞面目はかへつて一難去つて一難來ることに發揮せられた。翁は阪根家の親戚の人々にも相談をかけて見たが、世間の風は冷たかつた。誰あつて近づいて來る者もない。周圍の冷たい人間世界に、まつたく孤獨の境涯に放り出された阪根翁は頼る邊なき身であつたらうか。翁は人間に捨てられた。しかしその刹那翁は永遠の光りを見出した。佛の力を見出した。

わたくしはかつてライオン齒磨の小林氏について聞いたことがある。小林氏夫妻は東北の田舎から東京に出て來て十年の間夜も寝ないくらゐにして夫婦共稼ぎをして千圓の金を貯へた。その血の出るやうな千圓の金を懷にして故郷へかへり山の材木を買つた。小林氏としては乾坤一擲の大事業である。山の木は伐り出されて最上川（？）に運ばれた。しかもその夜大雨のため一本残らず材木は海に流されてしまつた。夫婦十年間の辛勞は一夜にして水泡に歸した。小林氏は呆然として橋の上に立つて川の面を見つめて泣いた。小林氏の袂には一錢の貯も

なく、燐寸がたゞ一本残つてゐるのみであつた。小林氏は川の中に飛び込まうかとさへ思つた。しかしその時小林氏は聖書の言葉を思ひ出した。小林氏は一切を失つた刹那翁を見出したのであつた。小林氏は再びさらに新たな勇氣を奮ひ起して立ち上つた。

孤高やがて近づく人もない程の偉大な人間となるためには、先づ深くどん底の試煉に耐へなければならぬ。

鈴 鹿 峠

阪根翁は失望のどん底に佛の光りを見出した。念佛信仰の光りに觸れた。そのところからのことである。翁は眞つ暗な中に起きて水垢離を取り、知恩院、清水と一日缺かさず朝詣りをつゞけた。

やはりこの貧窮時代のことであるが、翁は京都の親戚たちに相談をして見たが、誰も相手になつてくれる人もなかつたので、商賣の資本に困り切つてゐるところに、不圖思ひついたのは遠い名古屋の岡谷家のことであつた。そのころ翁は古鐵を買ひ集める商賣を營んでゐたが、商賣から家に歸つて來ても草鞋を解くこともせず、

さらさら茶漬をすませてはふたゝび商賣に出かけて行くといふ熱心さであつた。しかも佛佐吉と同じやうに正直一圖の取引をやつてゐた。その熱心さと正直な取引が買はれたのであらう、名古屋の岡谷家では擔保もなく五十兩といふ大金をぽんと投げ出して貸してくれた。

その時の翁のよろこび方といったら、天にも昇る心地であつたらしい。翁は晩年になつてもよくその折のうれしかつたことをくりかへして語つてをられたといふことである。

翁は五十兩の金を懷にして、飛ぶやうにして名古屋から京都に還つて來た。道はやがて鈴鹿の難處にかゝつた。夜になつてゐた。その頃は大金を携へての道中はまだ危険であつた。まして夜中の山越えである。

翁はその危険を察せないわけではなかつたが一刻も早く京都に歸つて可愛い女房子に金を見せて喜ばしてやりたい一心から夜道をかけて鈴鹿を越えたのである。

不吉な豫想は現實となつてあらはれて來た。峠にかゝつた時、人相の悪い二人の男が道の真ん中に焚火をして待つてゐた。いふまでもなく追ひ剥ぎである。懷には

五十兩の金を入れてゐる。絶對絶命である。天に訴へても地に伏しても今は詮ないことである。せつかく五十兩の金を得て天にも登るよろこびに浸されたのも束の間で、今は千仞の谷底に蹴落された。それだけに翁の絶望を察することができる。

しかるに幸なことにたま／＼一人の背の高い頑丈な侍が翁の後ろから山路を登つて來た。天の助である。翁は事情を話して武士の後から痕いて山路を登つて行つた。

武士はいかにも大膽な男で焚火をしてゐる。山賊の前にどつかと腰を卸して、「御免！」と言ひさま煙管を出して悠々と焚火の火を貰つた。二人の賊は氣を吞まれたのかあたふたと山を下つてしまつた。

旅の武士のおかげで翁は命拾ひをし、五十兩の金を抱へて走るやうにして京都に歸つて行つた。一刻も早く妻子をよろこばせてやりたいために。しかし翁にはどこまでも不運がまとひついてゐた。翁が金を懷にして家にとどりついた時、翁を見てよろこんでくれる筈であつたが一人の子供は死んでゐた。(つゞく)

江南の風景



江南の風景

上海から杭州へ、日本の汽車が走る、無惨に爆破された建物の残骸が漸く視界から消えて行先にはひろくとした麥畑が果て知らず

中 支 風 物

須 賀 隆 賢

(畫 と 文)

開けて来る。クリークが、楊柳が、村落が、櫓の影に野菜を洗ふ女、畑に鋤を打ち下す農夫、龍骨車をぐる／＼まわしながら水を田に引く水牛の姿、すべてはなごやかな田園の風景である。

松江、嘉興、と行く先々に次々に塔が送り迎へてくれる。皆それ／＼特異の姿を持つて大空へそ／＼立つてゐる。塔は江南風景になくてはならぬ主題の一つである。

めづらしいものは棺である。田の中にも麥畑のどまん中にも、桑の木の下にも、丘の上にも、處きらはず寢棺がころがつてゐる。裸のままのもあれば、土蔵のやうに土や瓦で包んで屋根をのせたもの、土で覆ふて土まんど

うにしたもの、大きい小さいのいろいろである。土まんどろの上に夢見るが如き目つきをして水牛がねそべつてゐる。茅花が銀色の穂を波打たせてその鼻づらをなでてゐる。

一塔去れば一塔來り麥野ゆく
墓あれば茅花咲くなり曠野ゆく 無量子
どこまでもつゞく青麥兵佇立 //

地上の天國

「上有天堂、下有蘇杭」と華人の褒め且つ誇る杭州の夜は先づ小鳥の聲からあけそめる。鶯の音に夢さめ扉を排して露臺に立てば、「天下第一西湖之風景」が眼前に彷彿として開けてゐる。白堤が天橋のやうに、うつすらと湖面に浮んでゐる。楊柳の茂みに鶯が囀

り、橋の上では眼白が歌ひ、孤山にはしきりに志孝鳥が叫ぶ、と招賢寺から思ひがけなく木魚の音がボーン／＼と流れてくる。放鶴亭の彼方から曉の鐘の響が水を渡つて聞える。夢ではない、私は顔も洗はずに旅舎を飛出し、橋を渡り、放鶴亭に登り西冷廟に詣で、遙かに湖心亭、阮公墩、蘇堤を望みながら苔蒸せる墓地を逍遙徘徊するのでした。

岳王廟、靈隱寺、淨慈禪寺など一めぐり、蘇堤の並木アカシヤの花陰を幾臺とつゞく黄包车……まひるの陽光にうと／＼と睡氣さして夢路ゆく心地、楊柳のなまめき樹陰に畫舫の媚態、すべては詩歌の世界であり、夢の世界である。たま／＼兵馬が走り、砲車がきしりはするが、それために西湖の静寂はかき亂されはしない。

アカシヤの花蔭つゞき兵馬憩ふ 無量子
橋くぐる西湖の畫舫涼しけれ 〃
綠蔭や軍馬嘶きかけり来る 〃
兵もしばし駒とめて西湖涼しけれ 〃

光 華 門

私達は今南京城光華門の下に立つてゐる、衛兵の番所を右手に、仰げば城門の上、皇軍英靈の墓碑を護る如く銃剣の兵隊さんが立つ

光華門



てゐる。私達は左手の傾斜を登るべく城壁の下に近づいた時思はず足をとめたものです。雑草の茂れる堆土の處々に舍利頭が散らばつ

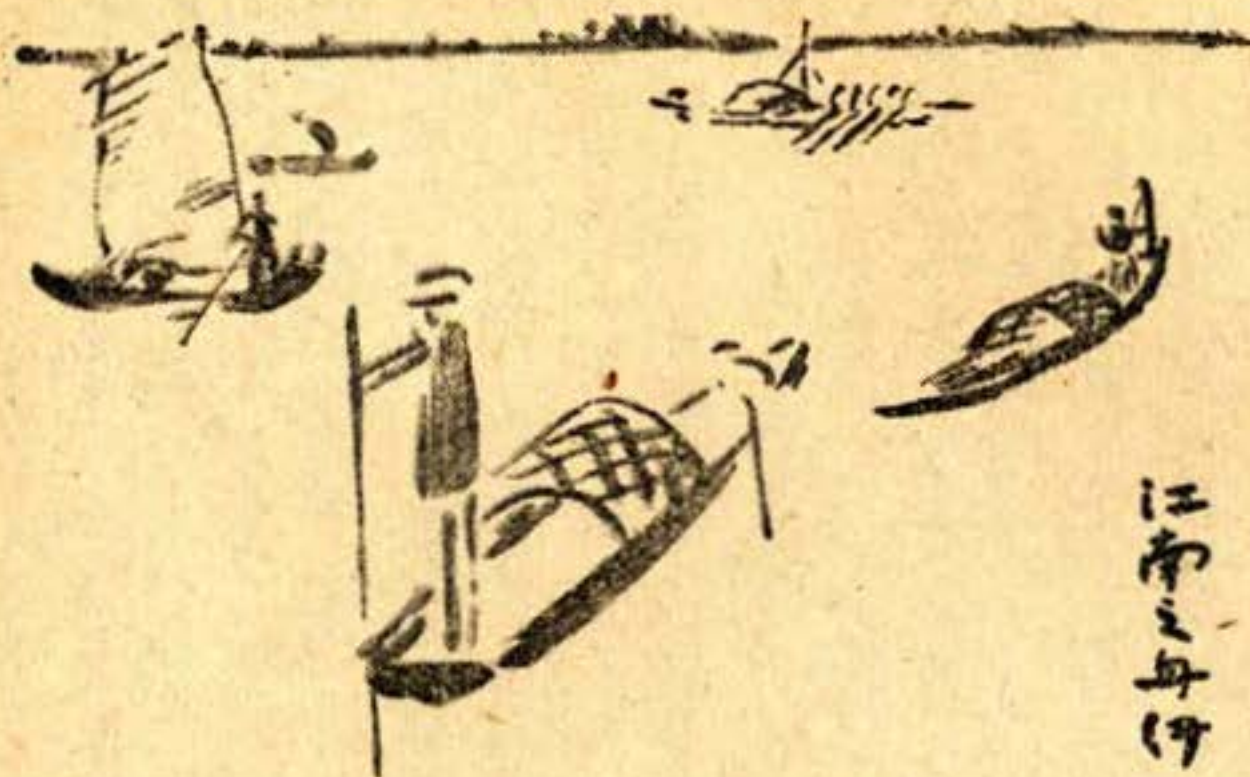
てゐる。茅花が眼窩からのぞき、薊が刺のあ
る葉をひろげ、血で染めたかのやうな花を上
げてゐる。こゝはいともはげしい戦が戦はれ
たところ、無惨に破壊された突撃路「脇坂部
隊一番乗り」と記した木標、伊藤部隊長戦死
之地「これ等が戦況を雄辯に物語つてゐる。
すぐ眼の下五百米ばかりに見える兵舎が我
攻撃軍の本部であつたと聞く、ほんに眼と鼻
の間で敵味方攻防の秘術をつくして對峙せし
こと幾日か、機銃の響、迫撃砲弾の唸り、巨弾
の炸裂、城壁の崩壊、突撃の鯨波、日章旗の
はためき、それは夢ではない、嚴然たる事實
である。眼を閉つると當時の光景がアリ／＼
と見える、聞える。私達は炎熱の下、合掌誦經
して佇立これを久しうしたことでした。
戦のここもあととなり紫雲英咲く 無量子
戦は去りぬ薊は花を上げ 〃
天險に一賊もなく夏来る 〃
ここにまた一英靈や草茂る 〃

布 袋 和 尚

蘇湖公園の北廣濟寺の第一堂中央に頭張つ

てゐる布袋和尚の文句がうれしい「天下の容れざる所のものを容れ、世人の大に笑ふ所のものを笑ふ」とある。便々たる太つ腹は清濁併せ呑むといった氣魄を示し、呵々大笑せる相貌は毀譽褒貶何するものぞと、人間の智慧

江南之舟



や小細工を笑つてゐる。善惡邪正、是非曲直、利害得失と云つたものは、みんな忘れろ、捨てゝ來いとすゝめてくれる。華人は數千年來この和尚の感化を受けて特異な人生觀を編み出したものである。尤洋として奥底の知れぬ、是非善惡に無關心で倫理を超へた一面を持つてゐる。ぼんやりしてゐるやうで要領を得、はつきりと裏表があり、雜然としてゐてどうにかまとまつてゆく、日本人の理念や、そろぼんではどうにも、こなせない、割り切れぬ思想と生活とを持つてゐる。日本人のやうに正直で生一本で、何でも辻褄が合ひ、割切れなくては承知が出来ず、裏表のあるのが嫌ひで、重箱の隅を楊子でほじくるといつたゆき方では支那向とは云へない。無爲にして化すと云つて志子の思想や、孟子の教へも研究せねばなるまい。さしづめ五乘齋人、萬機普益、あらゆるものをそのまゝに包容して救ひ生かす道を教へられた法然上人の教へは支那向として恰好なものである。ともかく今後宜撫工作に従ふ者、相提攜して興亞の新天地を開拓

してゆかうとする者にとつて、布袋和尚は大きな示唆を與へてくれるでせう。

揚子江

悠久幾千年、揚子江の濁流は今につゞく。百年待てども長江に河清はない。或時は海の如く、或時は河の如く、或時は湖の如く、晝となく夜となく、赤土色の濁流を押し流してゐる。未だ曾て底を見せたことのない謎の流である。「此の水が清く澄んでゐたら、どんなにいいでせうね」私は大吉丸の船長に話しかけますと「どうして。そんなことになつたら大變です、底が見へたら恐ろしくて通れませんよ、濁つてゐて底が知れないから安心して通れるんですよ」と、此處にも日本人の考へでは割切れぬ支那の姿を見るのでした。南京から私達の乗せて貰つた北〇丸といふ病院船は晝行き夜行み、二日三日五日とこの長江を溯るのでした。おひる近く船員がお膳を並べる、茶碗の音がする。かうした窮屈な船旅である。どんなものがいたゞけるかと

われながらさもし根性である。お皿には大根の千切である。梅干が一つ、御飯は麦七分の軍隊めしである。私達は「いたゞきます」と箸を取ったのです。晩の食事の用意です。「何かあるのだらう」と心の期待は大きかった。並べられた膳の上、よく見るとやはり千切である。油揚げが二つ三つのぞいてゐる。それに澤庵漬が二切、お互に顔見合せていたゝいたものである。朝の味噌汁にも勿論千切が浮いてゐる。おひるのおまわりも千切である。今度は鍋詰の牛肉が廻り出された。

洗面所の前には千切の箱がどつさり積まれてゐる。當分おかずに心配はゐらない、とら／＼漢口上陸まで四日と半日千切と澤庵で勇敢に押し通したのです。私達は漢口で千切におさらばをしたのですが、同船に配属されてゐる四十九名の看護婦さん達も私達と餘り異なる食事をあてがはれて、傷病兵の輸送看護になれない海上生活をつゞけてゐなさるのだと思へば、何となくすまないやうな氣がして頭が下る。

楊子江上往復十日の思出は深い。安慶の高塔を右に九江の要害を左に船は曲りに曲つて溯る、廬山はその巔を雲に隠してゆつたりと後ろに横はつてゐる、田家鎮、陽邏など要所々々に鐵兜の哨兵を見る毎に、旗やハン

楊子江上

氏家



ケチを打振つて御苦勞さんですと聞えないまでも叫ばずにはゐられない私達です。武昌の空に三日月を眺めつゝ假泊した船は、翌朝漢口税關の大時計臺沖に錨を下しました。武漢三鎮の戦跡巡禮、德安駐兵の郷土部隊慰問、中支軍司令部主催の大慰靈祭參列など要務の爲め旬日を過ぎた私は再び長江の客となり、陰曆十四日の月影を潯陽江頭の流に見出したのです。江波に踊る月影の美しさ、いぶしたる銀盤の上にとぎすませる、ゆるやかなる橈圓の波紋……忽ち線條の瀟灑様が出來たかと思へば點線の亂舞……その刻々に變る千態萬様の姿、それは楊子江の濁流でなくては見られぬ異觀です。こゝ廬山を背景にした九江の港は眠れるが如く靜かである。楊子江の流れは音なく無心に流れてゐる。あゝこの明月、この良夜、戦時でなくば琵琶を弾じ、客を送る人もあらう、私は獨り小聲に琵琶行を口誦さびながら江波に踊る月影を見まもるばかりでした。

(筆者は東山中學校長、無量子は同行の野島宜道氏の俳名なり)

人間漫語

代議士 三木武夫

これは東京にゐる私の知人の話である。

普段は極く口数の少ない、おだやかな、しかも仲々に信仰の深い人であつた。

その人が召集令状を受取つた。

その時は一時顔色が蒼ざめたそうである。

一時間ばかり獨りにして欲しいと云つて家人を遠ざけて書齋にとじ籠つてゐたが、再び姿を現はした時にはまた元のやうな明朗な顔付きで何気なく家人と語り、後々のことも残りなく申渡して、出征の時には平常と少しも變らない元氣で出征した。

つまり、書齋にとじ籠つてゐた一時間の中にすっかり生死を超脱する覺悟が出来上つて

しまつたのであらう。

それは非常に尊いことであると私は思ふ。

普段は偉さうなことを云つてゐても、生への執着、様々な欲望、野心などは人間の本性なのだから、これこそが人間を作り上げてゐるものなのだから、大事に際會して心が動揺し、顔色が変わるくらひは極めて當然な話なのである。悲しみ、笑ひ、惧れるのを嘆ふことは出来ないものである。唯悲しみ、喜び、惧れに溺れず、目的に向つてそれに打勝つことが尊いのである。それが出来て始めて人間なのである。

かう云ふ話は何にもその人に限つた事では

あるまいが、私はこの話を聞いて人間の尊さの一面をまぎ／＼と見るこゝちがした。

たゞこの覺悟が早く出来るかどうかは平常の修養如何できまることである。かう云ふ時にこそ宗教的修養がその眞價を發揮するのであらう。

○

私は、ある人の出征を送るためにその家に出かけた。町内の在郷軍人会、婦人会などを始め、大變な見送り人で、當の出征軍人は一々の應接にいとまない有様で、ろく／＼家人と口を利いてゐる暇もない。

戶外では見送りの團體の人々や何にか茶碗で酒を飲んで、大聲で話し合つてゐたり、樂隊の練習などをブカ／＼ドン／＼とやつてゐる。近所の子供達に菓子袋を分けてやるので、子供達がか／＼寄つて来る。騒がしいこと限りがない。興奮の渦と云ふのか、唯騒ぎばかり大きくて、一向に落付いてお別れの挨拶などを交してゐる暇がない。——これが生死の程も解らぬ出征軍人の訣別の場面であ

る。

その中に町内の世話役が、もう時間ですから、出征の方は玄關へお出を願ひますと云ふ。玄關先には在郷軍人、婦人會の人々がずらりと並んで、交るがはる祝辭を讀んだり、激勵の演説をやつたりする。それも各別その特定の人のために作つたものではない。そして最後に出征軍人が立派な挨拶をのべ終ると行列が動き出して、出征軍人はその中へ入つてくれと云ふ。で、彼は一寸家人の方へ顔を振り向けたゞけで、その行列の中へ押込まれるやうに飛込んで、その儘さつさと出かけてしまつた。妻子はあつけにとられて主人の後姿を見送るばかりである。

(寫眞は筆者)



その時私はいさゝか胸のつまりる思ひがした。女々しい振舞があつては勿論ならないが、然し妻子に別れて遠く征路につくのは並々ならぬことである。もつと落付いた愛情の籠つた袂別があつていゝのではないか、とそれがその時私の胸を衝いた感慨であつた。

あの歡送の方法はもつと人間的な仕方に改めることが出来そうである。

○

日本人は昔から感情を外に現はさない修業をしてゐる。それは良いことでもあるが、また悪い方面をも持つてゐる。それは外形からだけで人間を律し、豊富な内側の生活をないがしろにする傾きがあるからである。

日本には昔から「人情」と云ふ立派な言葉がありながら、時々この人情を省みないやうな事實に出逢ふのはまことに残念である。

○

人間が美しいのは最初から神ではないからである。

私は一昨年議員團の一員として北支の戦

線を視察し、最前線で皇軍の壮烈な山岳戦を目撃したが、その時、凡ての執着と欲望を断ち切つて、唯一の大生命のために自己を捧げてゐる人間の姿を見て、その尊さに涙を流すばかりであつた。その時の皇軍將士はそのままに神であつた。

その時私がうたれた人間の美しさは人間のみが持つ美しさである。平常は煩悩の汚濁の中を泳ぎ廻つてゐる人間であればこそこの瞬間にはかくも偉大なる勇氣を奮ひ起し得ることが無限の尊さとなるのである。

豊かで複雑な人間の内側の生活を無視して凡てを一つの型に嵌めやうとしてもそれは無理である。さう云ふ形式主義者共には人間の本當の美しさは解らないのではないか。

○

凡人が凡人なりに淨土に往生出来ると説かれた法然上人の教へはまことに尊い。そこには人間への深く温かい同情がある。この時局下にこそ、凡ての人々が人間として扱ひ人情の華を咲きたいものである。

支那佛教の状勢

中支宗教大同
聯盟佛教部長

福田 闡 正

支那佛教に就て或人は左も通らしく支那の佛教は衰頹してゐて何等論ずる價值なしと申さる、亦或人は支那佛教は民間即ち居士林あたりに残つてゐて殿堂や僧侶間には何ものも残つてゐないと言はれる。

表面觀察した處では兩者の主張は何れも眞なりと眺め得られるが、事實は左程見くびつたものでもないと思はれる。蒋介石の如き軍閥の前には寺院を何とされても抗議するものはない。寺院の境内に兵營を建てたり寺を破壊し盡して軍用宿舎にしたり、寺の庫裡其他を病院にしたり馬廄所にしたりするのは如何とも抗し得ないから、軍の辯ずるまゝに放任してあつたから今回の戦闘に多くは破壊され

實に見兼ねる程に荒らされてゐるのである。蒋介石の天下となつて國民黨が横暴を極めるにより反佛教思想の底力と合體して、言語に絶する程の破壊を敢てされてゐたところへ日本軍から見れば敵産なりとされて破壊の上に更に破壊を加えられたから實に無慘な状態となつたのである。

廣東に報恩寺と稱する大寺がある。國民軍の兵營もあり寺内全部兵隊と首腦部が使用してゐた爲に随分みじめに破壊されてゐた。其寺に向つて左側に西林寺といふ小さな淨土宗の寺がある、予の師籍が西林寺である因縁上其寺を訪ふていろ／＼聞いてみた。此寺の境内は全部蒋介石に取揚げられ今は澤山な貸家

……大陸だより……

長谷川良信

青島より濟南まで支那の東側面四百哩程ゆき、歴史を顧み現状に首肯するもの多々、日本人が今壓倒的勢力を以て之を指導してゐるが、その將來や奈何の問題は實に深刻な問題である。漢民族は所謂内剛外柔で、人間的に世代を経てゐるだけ底深いネバリを持つてゐる。日本人式な簡明直截流ではトテモ押し通せないことを思ふ。一概に「謎の國支那」など云ふて片づけるわけではなく、もつと深く研究してほんとうの文化工作を必要とするかに存じます。

○ 今濟南別院で百數十名のコード



が出来てゐて家賃も毎月幾百元づゝあがり皆悉く軍費に當てられ寺は名ばかりの一角百坪の狭き處に住む憐れさである。予は復舊氣分に燃え寺の住職といろ／＼相談し、何れ淨土宗僧侶が来て復舊するから楽しみにして待つておれと約束した。此寺の如きは廻りの貸家は其まゝとして寺の維持費に當て、境内眞中の舊本堂のあつた處（今は合宿兵舎）に新に本堂を作つて日支兩僧が親善寺である西林寺を復興したら、支那僧も喜び支那民衆及信徒も喜ぶことと信じてゐる。日本淨土宗開教にとり大なる効蹟であり、親和工作上尤も必要なる事と信ずる。

南京の維新政府總理梁鴻志君を初め地方民衆に會する度に、「寺院の破壊は人心の破壊なり」と主張したが皆悉く同感なりと共盟した位であるから相當寺院の事には心を痛めてゐるのである。此の寺院復興を日支人協同して行つたら親和工作上重大なる成果を得ることを甚大なりと信ずる。支那は何と言つても古

い歴史と習慣とを守る上に於て否彼等の心の奥底に於ては寺院と僧侶、佛教と民衆の關係は切つても切れぬ或種の信仰と信念には燃えてゐるのである。外見を以て、皮相觀を以て、律することは大なる間違の素である。

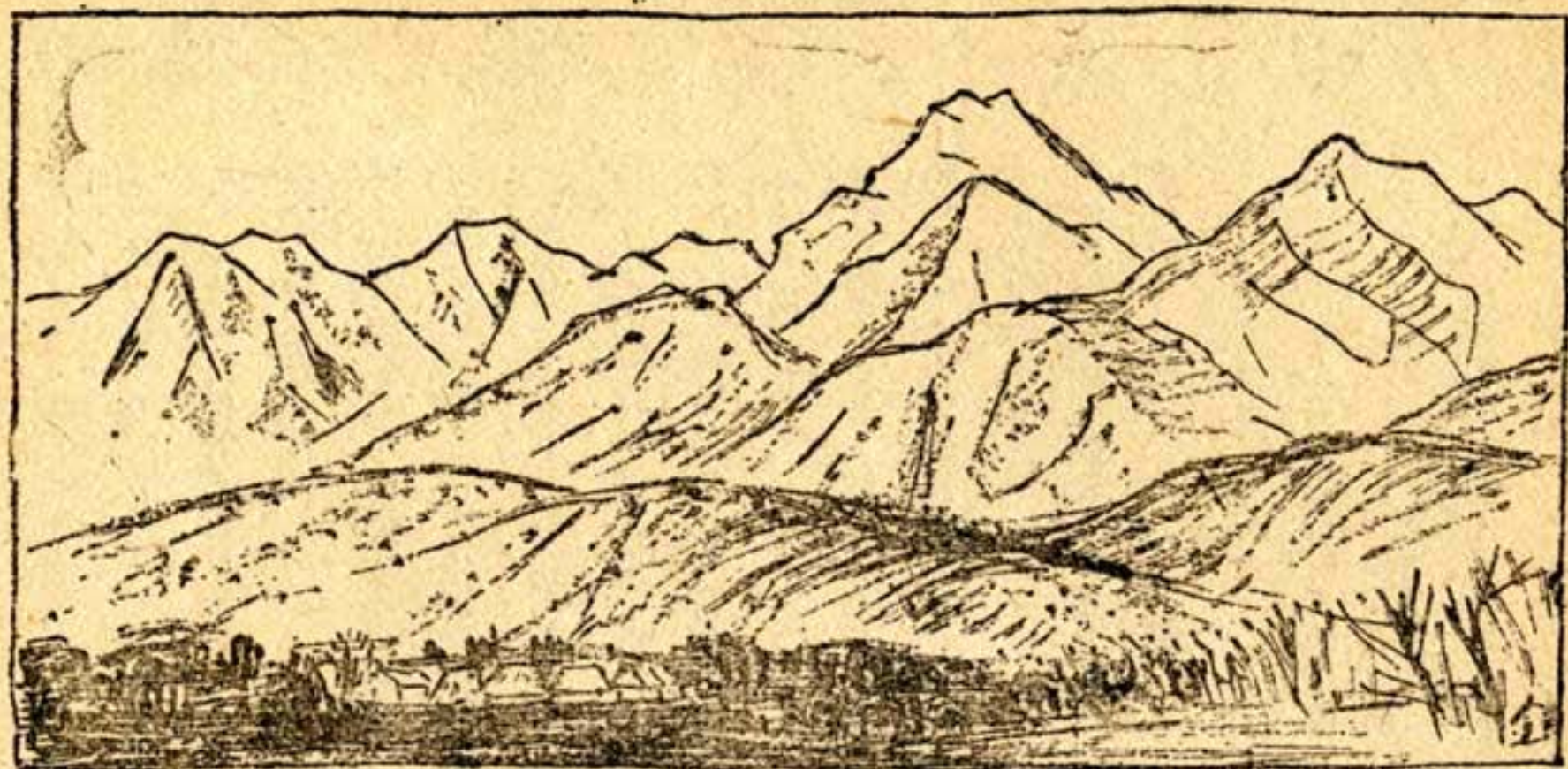
然るに支那僧侶は普通支那人と同じく頗る個人主義が多い。經文を讀み良く理解し悟道の境に至るも自己獨り諒解し悟道に入り、他に向つて働きかけることをせず、獨り澄みきつて酒々然としてゐるのである。此の邊を是正して天下國家に訴え民衆教化をなすに至らば實に申分がない。現代の世には民衆の聲をきゝ民衆をして向ふ處を指示し大に國の爲め人類の爲め誤らぬ模範教化して進むことが現代の急務である。自己獨り證悟しすました顔して佛につかえ佛の如く尊敬さるゝだけでは何の役にたゝぬ時である、我等日本の僧侶は先賢者として支那僧侶を誘導指導して現代適應の學に出でしめるべく努力し、眞に恥ぢざる行動に始終すべき事は當然である。

モに話をしてゐます（通譯つきで）。コードモは大聲で立派に愛國行進曲を歌ひ月影の歌も上手です。さすがに音樂的國民の名に違はず堂々たるものです。體軀の長大にして悠暢なる、女兒などまことに賢くそうです。

支那婦人のオルガンの合圖「シン四ウ」と云ふ敦厚ではあるが、氣分は重い。何處となく陰性なとけ合はないものを感じる。

願ふところはこの二國民に如來の一子、愛の慈光ゆたかならんことをだ。コードモ達の遊びの元氣よき、明朗北支の陽光は強い。日はかくも隔てなく照して下さるに。

（マハヤナ學園長）



説小

山やま

蔭かげ

平 郡 一 郎
鈴 木 金 平 畫

私は小説を書きたいと思つてゐました。どんな苦勞にもまけない人生が書きたかつたのです。それからまた人間どんなに富貴を極めても權勢を極めても秋の陽が沈むように靜かに死んで行く。そうした抗することの出来ない人間の運命があるにもかゝらず人間の世界の多様な姿は目がくらむばかりです。そうした人の生活を思ふまゝに書いて見たいと日頃考へてゐました。三十を過ぎてこうした氣持である自分をはづかしく思います。ほんとうですからかくしてもしかたがありません。それで小説を書くと言つたことから編輯のMさんと約束してしまつたのですが、さて小説なんて讀むほどに容易に書けるものでありません。それで私は自分の生涯で一度はこの人のことを書きたいと思つてゐたKと言ふ禪宗の和尚さんのことを書うと思ひます。私はこの人に高恩を受けてゐます。然し恩返しに萬分の一つも出来ない中にそのK和尚は寂しく死んでしまひました。もう死んで七年が来るでせう。現在私はこの人の情をヒシヒシと胸に感ずることが出来ます。自分の寺の本堂を建立せよと言はれたこともはたしました。それでこの物語をどこから書き出したらいのか素人の私にはむづかしいのです。とても頑固の老人で

した。

そして、もともとこの人は坊さんではなくて山梨縣郡内の出身で、昔は少しは名に聞えた博賭打などやつてゐた遊び人でした。それが中年になつて寺の門に入つて頭をそつたのです。そのK和尚を私の父が世話して父の寺の末庵に入れたのです。私の父もやはり僧侶です。父がどうしてこのK和尚を世話するようになったかは知りませんがK和尚は父を信頼し尊敬もしてゐました。父も心をゆるしてゐたやうです。父が死ぬとその末庵を自分から出て近くの禪寺に入りました。K和尚はその禪寺で生涯を終つたのです。私はこの人の傳記をこゝで書うとは思はないのですがこの和尚について思ひ出す幾つかの思出話を組立てたならばそこにくみつくせない人情の泉、人間愛を讀者の人々が感じてくれるのではないかと思ふのです。

私が少年時代K和尚はお正月やお盆が來ると必ず私達兄弟にお年玉やお小使ひをくれました。然しそのくれる金高が嚴格に等級を付けてゐました。私に三十錢くれると弟には二十錢その次の弟には十錢、それは決してたがへませんでした。

ところが和尚にとつてこの三十錢二十錢十錢と言ふ金は決して少ない金ではありませんでした。なぜかならばこのK和尚は一錢、五厘をもムダにせずジツト考へて暮してゐました。私達はマツチの棒一本そんなに考へて使つたことはありませんが、とても煙草の好きな人でした。が朝眼がさめてから煙草が喫みたくともカマドの下にマツチ一本使つ

て火をたきつける前には決して喫みませんでした。カマドに火をつけて火種を作つてから煙草をのみました。

どうも話が前後したり讀みづらいと思ひますがかんべんして下さい。このK和尚の住んでゐた寺と言ふのは東京から遠くない半島の南端で海岸の近くの山の陰にありました。その山寺のような静かな寺に獨り住んでゐました。猫が好きで猫は三四匹ゐました。和尚が外から歸ると足音でよくわかり門の所まで出て迎へると言つて喜んでゐました。或る時、冬の暖い日に庭に梅の花が咲いてゐる縁側で誰かと話してゐるかと思つたら猫とでした。私は父が死んでから學生生活やその他東京の生活で十年ほど田舎に歸りませんでした。いつも心から案じてくれたのはこの和尚でした。私はかなり人生に苦惱して田舎に歸りました。世間からも色々誤解されてゐました。でも私は惱みつゝも自分の歩む道がまちがつてゐるとは考へませんでした。なぜかならばその當時、もう十七八年も前になりますが、私は都會の勞働者の中で働いたり遠い地方の農村に行つて働いたりしてゐました。勞働組合や農民組合の仕事でした。でも私は田舎の寺に歸つて、そこでほんとに眞實こめて働かうと思つてゐました。私は田舎の町で自分が生涯土をかぶるまで静かにすごすことを空想しました。然しその心はK和尚にすまないから田舎に歸らうと思ふ心が過半でした。然し田舎で白眼視されて過した數年の生活は自分の行動によるものでしたが随分淋しい生活でした。私は心を強くもつてたゞかつたその頃が思ひ出され

ます。別に私がたのむわけでも他の人がたのむわけでもないのです。が、K和尚は私を誤解してゐる人の家を歴訪して二時間でも三時間でも座つて動かないでゐたそうです。どんなことをこのK和尚は論じ合つたかしりませんが、随分見當外れの暴論をおくめんなくやつたと思ひます。今思ひ出しても涙が出ます。短刀を懐にあの男がどうしてわからねばとのりこんで行つたこともあるそうですし、私のことを、「俺の言ふことがまちがつてゐればほんとに腹を切る」と言つて腹をたゝいて歩いたそうです。別にこれと言つてふだん用がないからだなので時間など平氣だつたやうです。

私はこのK和尚の話をして自分の恥を書いてしまひました。然しK和尚のことを書けば私をかくすわけには行きません。

それからK和尚が特にリンシヨクであつた爲めにすべてが細かつたと言ふことでは決してなかつたのです。K和尚は自分が受ける一切が尊い感謝であつてマツチの櫛一本、半紙一枚でも決してムダには出来なかつたのです。昔は随分思ひ切つて遊んだり、色々をことをして來た人のようでしたが随分かわつたものです。人の心などと言ふものは簡單におくそくは出来ません。私はほんとに教育を受けた僧侶の自分がはづかしいと思ひます。K和尚は村の小學校に名前を秘して毎年貧困家庭の児童の爲めにと言つて着物を二反づつ寄贈してゐました。それは理髪店に月二回行くのを一回にして一回を行つたつもりでためて、小供の着物にしたのであります。また方面委員制度が町村に施行

する前からのことです。これからK和尚が自分のたくわへた財産を傾けて自分の墓がはりにと言つて荒れはてた寺を修復しましたが、それは關東震災の時に倒壊してしまひました。もうだめだと言つて落膽してゐた姿が目に見えるようです。そして僧になつた自分を心から自分で信じてゐるのでした。俺は坊主だと言つてともすれば寺院生活を忌避する私の不心得をせめました。

K和尚の寺の門を入るといつも豊富に薪木が積んでありました。それを言ふと毎日一本づつ儉約して行つても一年には三百六十五本、この數の薪木は決してソマツには出来ないと言つてさもうれしやうでした。私はそんな話をきく時頭がジンとあつくになりました。その頃よく計畫經濟などと言ふことが言はれてましたが、私はこのK和尚の生活を見てゐると中途半端の生活のしかたがいやになりました。

フィリップの少説だかに西瓜を盗む盗人のことが書いてありました。が、決極丹精こめた農夫に見破られると行ふ話です。K和尚は庭の樹木などとても熱心で果樹など一本の木に何個ついてゐるかを丹念に數へ上げるぐらいのことは朝飯前でした。

このK老僧が晩年に妻君が欲しいと言ひ出して私をえどろかししました。實際どんなつもりであつたかを私は知らない。近所世間ではK和尚の妻君の話では今でも笑ひ話になつてゐるほどですが、たゞ獨りで病氣したり老人になつてから臺所から一切のことをやることなど考へると私はK和尚が「妻君が欲しい」と言ふ氣持があまりにさみしく胸



にこたえて東京から知人にたのんで田舎の山寺に来る身寄のない婦人をさがしてもらいました。三人ほどそうした婦人がありましたが、最初の二人は一週間ほどで歸つてしまひました。三人目の人はK老僧が死ぬまでゐました、そして今日でもその老僧の人となりを稱へつつ土地を離れずK和尚の墓所と位牌に香花をそなへてゐることから考へて、私はK和尚の人格がしのばれるのです。K和尚の我儘が強くて東京から来た婦人がおどろいて歸つてしまつたのではないと思ひます。たぶん山寺の生活とその徹底した經濟生活に驚いたのでせう。

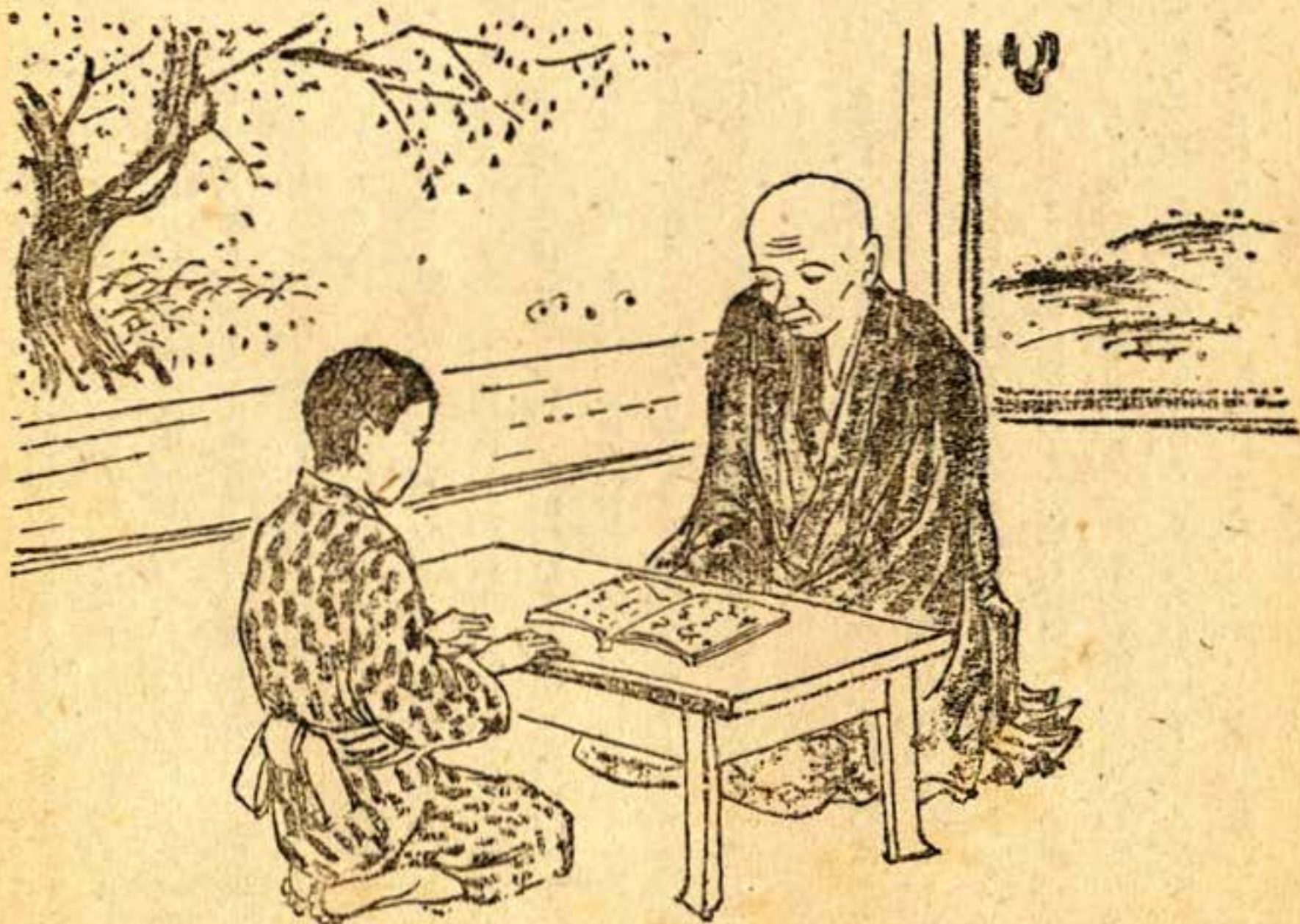
目に一字も讀むことを知らなかつたK和尚でしたが、でもひらがなは讀めました。それは、子供にお金を與へてはひらがなを書かせ書かせしながら覺えたのだそうです。K和尚の寺に行くと塔婆の字をブリキに切り抜いてあつてそれに墨をぬると塔婆の字がうつるようになってました。

K老僧の話をこうして書いてゐますと次から次に思ひ出しますが話の組立が出来てゐないので筆にまかせて書いて行くとはてしがありません。この老僧の眞に求めた心構は何であつたでせうか。たゞ残念に思ふことはこの老僧に接してゐた頃の私と現在の私の心境の相違です。その頃の私は一通りの生活や社會の苦惱はなめたつもりでゐても生きてゆく生涯の心構が今日とは全然ちがつてます。人生を強く生きることがたゞ最後まで闘ふ人生でした。闘つて倒れ、破れてもよいではないか。もし現在私に安靜の生活があるとすればそれはほんとの方

便か僞隠以外にはありませんでした。何と心の餘裕がなかつたことでせう。月をながめても心を慮しく眺められませんでした。おゝこの月をいつの日か、どんな世界でながめるのかと言つた心に追はれました。だからK和尚から見た私の行動は随分歯がゆかつたのではないかと思ひます。人の情を情として受けとれないことは淋しいことです。

K和尚は自分が僧侶になることで以前の生活から全然新しい生涯を求めたのでせう。だが最後に獨りで淋しく死んでゆかず婦人を求めた心が何か矛盾があるやうです。それを言ひ切つてよいかどうかわかりませんがK老僧は自分の家系をその土地に残したかつたのです。それで婦人に來てもらい、その間に養子をし、その養子にK老僧の名目をつがせたかつたのです。だからK老僧の所に來る婦人は入籍出来るものと言ふ條件がついてゐました。然しそれはうまく行きませんでした。そしてだんだんいらいらするやうになつてやつと落着いた婦人を罵倒し、かつてのさとり切つた禪僧の姿もなくなりました。經濟的に、最後にはたくわへもとぼしくなつたやうです。それは二重にK老僧を焦慮させたのではないかと思はれます。

寺の收入としてはほとんどない破れ禪寺、K和尚が住むやうになつてやつと寺らしくなつた寺です。そこでK和尚が晩年に求めた婦人を罵倒し焦慮してゐた様子を考へると胸が熱くなります。然し心の中は何もわかつてゐて心で拜みながら言ひたくない悪言を人の世の矛盾やまゝならぬ運命に泣きながら言つてゐたのではないかと想像出来る



やうです。

先頃そのK和尚の婦人に逢ひましたら涙をたゝえて老僧のことを話してました。その時にこんな話を思ひがけなく聞きました。「妾はこうして今でも生きてゐる時と同じようにご位牌につかへてゐます。それで何一つ思ひくやむことともありません。たゞあまりに頑固で私の言ふことを聞かないで、私の言ふことを聞いてくれなければ老僧の言ふこともきゝませんと言つて随分老僧が私に求めたけれど、それをきいて

やりませんでした。それが一つだけ心のこりです。私はそれをきいてガンとたゞかれた心がしました。然し私はそれを聞いても老僧を少しも侮蔑しません。私は今自分が鼻の先であしらつてゐた當時のK老僧の言葉、思ひを誰にもまして有難く思つてます。恐らく僧としては誰の問題にしない中年坊さん、建長寺で度牒を受けてその末寺の住職に世話になりそして今話した寺に住職しそして往生をとげたのです。

山蔭の寺、草深い淋しい寺、永遠に誰も思ひ出さないであらう孤獨

たてかけてありました。私は玉和尚のことを思ひ出した。ながらその老僧往生した村を數日前乗合で通りました。少しガニ股の老僧が頭に手拭をのせ近所の女衆をからかいながら塵ほい村道を歩いて來るような氣がしました。(をはり)

新版

大羽比羅

やくざ道中

Heart

なんだ
せなか
背中
か
きびしいな
あかぎ
赤城の子守唄には
カン太郎がききものなんだ』



×
 ×
 ×
 ×



戦争と佛教

植村 諦 聞

戦争が始まると今まで神佛のことや、宗教のことなど考へもしなかつた人々が、戦場に出て征く愛する自分の息子や夫や父の爲に、街頭に出て千人針を求めたり、神社寺院に参詣してそのお守りを頂いて、これを出征者の行囊の中に收めて、武運の長久を祈る姿が至るところに見受けられる。この素朴なまごころを迷心だなどといって斥ける人は恐らくはあるまい。神佛の存在を疑つてゐる人でも、自分の武運長久を神佛に祈つてくれた贈り主の眞實に無條件に打たれてしまつて、そのお守りを肌身につけて、そこに贈り主が生きて自分を守つてゐてくれる様な心強さを覺えるであらう。

この素朴な贈り主のまごころと、贈られた人の感謝の心が、神や佛を中心にして結ばれた心の世界がそのまゝ素朴ではあるが、純眞な一つの宗教的世界といつて差支ない。そしてこの戦争といふ感動的な出来事によつて、この様に宗教的な零團氣が醸成されるといふことは、戦争が最も眞剣に生死の問題を人間の心に呼び起させるからである。純論理的に云へば、入る息出づるを待たずで、人間の生命は何時終るか分らない。昨日まで頑健に活動してゐた人が、今日はもう死の手につかまれてゐるといふ様な例は到る處に見受けられる。しかも死の縁無量で、道を歩いてゐて車にはねられた

り、一寸した食傷が因で死んだり、屋根から不意におちて來た瓦に打たれて死んだり、自分の隣に坐つて氣嫌よく話してゐた男が突然發狂して切りつけられたり、全く死が何處で吾々を待つてゐるか誰にもわからない。まことに、先聖の指摘された様に、戦争や、山登りや、航海や、さうした一見非常に危険と思はれることで死ぬ人は僅であるが、大部分の人はみんな最も安全だと思つてゐる疊の上で死んで行くのである。しかし人々はそれが何時自分に訪れるかは分らないから、さうして死ぬのは人のことで、自分のことではないと思つて安心してゐる。しかし戦争となるとさうは行かない。眼前に自分の生命をねらつてゐる敵が、鐵砲や大砲や、飛行機で、彈丸や爆彈を雨霰と打つて來る。その現實に當面しては、彈丸に當るのは人のことで自分のことではないなどとすましてゐるわけに行かない。いよく自分が生死の崖頭に立つたのだと切實に感ぜずにはゐられない。そこに始めて

日頃良い加減な理論や安心でごまかしてゐた生死の問題がその解決を自分に迫つてくる。そこに宗教心といふものがどんな人にも或る程度に起らずにはすまない。

佛教がその出發を先づ死の問題に置いてゐるのもこの故である。一通りの科學や哲學で自分の生命や行爲についての理窟をつけてすましてゐた人も、いよく今自分が死ぬのだといふ端的に立たされた時果して、どれだけその理論が役立つであらうか。その幼時から河内の觀心寺で宗教的な修練によつて育てられ、生死の問題についても充分の心構の出来てゐた楠正成の様な人さへ、いよく湊川の最後を決した戦ひに臨んでは、「生死交謝の時如何」と問ふてゐる。それに對して「兩頭截斷すれば一劍天に倚つて寒し。即ち生死の兩頭を截斷せよといふ答も、理論としては分つても、所謂ほんとうに分つた、満足した、安心にといふ氣持にはなれなかつた。まことらしい理窟や理論で満足できるのはまだ心に餘

裕のある時のことで、生死の端的に立つた時そんな理窟が何の足しにならう。更に問をすゝめた時に下された禪師の大喝一聲の端的に、眞のものを彼がつかんだのだとつたへられてゐる。淨土教が、世の無常をとき、人生の果なきを先づ強調するのも、この嚴肅な生命の現實に直面しない限り、眞の宗教心など起らないからである。

たとへ死は單なる肉體の解體であると主張してゐる無神論者や、唯物論者も、人間の事業の眞の意義を求め、その永遠性を信ずる爲には、その論理的歸結の根據として遂に完全具足の宗教の世界を肯定せずにはゐられない筈である。彼の人間の思考の限界以外のことを説くべからずとしたカントも、その理性の論理的究極の根據として神を認めざるを得ないといつたのもこの意味であらう。自分は今此處で死んでしまふが、自分の死は無駄ではないのだ、無意義ではないのだ、自分はその爲に喜んで死ぬのだといふ確信と、死の意義をだん／＼選つ

て行くと、遂には生命の永遠性の根據としての宗教の世界に至らざるを得ない。そしてこの永遠性の確信をつかんだものこそ、始めて死を見ることが歸するが如き大丈夫の心に安住することもできるのである。

佛教が昔から我が國武士道の母體であるといはれるのは、佛教は、他の宗教の様に、世界創造の神を認め、その神に祈願して自己の幸福や安全を求める要請の宗教ではなくて、如何にして生死の惱みと迷ひとを解脱して安心立命を得るか、成佛するかといふ覺悟の宗教であるからである。彼の道元禪師がいみじくも喝破された様に、「生を諦め、死を諦むるは佛家一大事の因縁なり」で、眞言、天台、禪、淨土、日蓮と、多くの宗はあつても歸する處は如何にして生死を諦観し解脱するかといふ方便に過ぎない。そしてその日常を戦ひの中に送つた日本武士にとつて、この生死を諦観するといふことが、如何に切實な問題であつたことか。源平の昔から、鎌倉、室町、戰國時代



習ひ性

大羽比羅夫

元兵隊の八百屋さんが両手に西瓜を持つた時上官にあひました。

を通じて、そこに示された日本武士の従容とした壮烈な死を見るものは、彼等の精神の根底に佛教によつて獲得した確固たる認識のあつたことを認めないではゐられない。事實これらの武將の中で、何等かの佛教的修練や信仰を持たなかつたものは殆どないといつても過言ではない。正成のことは先に書いたがその敵尊氏直義兄弟が夢窓

國師に師事して、天龍寺を立て、諸國に安國寺を建てたことも周知のことであり、戦國時代の英雄謙信や信玄といふ名が出家入道の法名であることは知らない人はあるまい。又江戸三百年太平の基を開いた家康公が熱烈な念佛の信者であつたことも餘りに有名である。

この様に佛教は、その生死を諦観することによつて生死を解脱するといふ道によつて、日本武士に、死を恐れないといふ戰の上に於て最も重大な精神的根底を與へた。死を恐れない人ほど強いものはない。眞の勇氣はそこから生れる。眞の美しい行動はそこから生れる。およそ人間の一切の醜い行爲は小さな果ない生に執着し、それを守らうとする努力から生れる。生死既に念頭を離れた者にとつては、そこには唯自己の全分を生かし切るといふことの外何物もない。君の爲、國の爲、一身を鴻毛の輕きに比して、名を惜しみ、義を重んずるの覺悟と行動も、眞に生死を念頭から離れた者で

なければ純粹にできることではない。この意味に於て、佛教が日本武士道の母體であるといふことも充分に肯定せられるであらう。

今次の戦争に於ても彈丸雨飛の戦場で、生死の端的に立つて、従容生死を滅却した壯烈な美談が無數に傳へられてゐるが、それらの人たちの平素の精神生活を調べて見ると、佛教的信仰と修練に因縁淺からぬ事實を無數に發見する。又平素宗教などといふことを全然考へなかつた人々が、戦場の切實な生死の端的に立つて、確固たる信仰をつかんだ人も随分ある。

兎に角戦争といふ様な生命の問題に直接觸れなければならぬ様な時代には、人間の疑惑や迷ひにつけ込んで一時的な安心や幸運を求める迷信的な宗教も盛んに横行するのであるから、この様な時代にこそ、生死の諦観と解脱を目的として數千年間日本の武士道を培つてきた佛教が、改めて見直されなければならぬと思ふ。

俳壇

大田・耳動子



東京 小山 藤念

病葉の吹きだまりあり初あらし

評—落葉ならぬ病葉の吹き溜りである。

然ともものを見てゐないところが良い

初嵐にふさはしい光景である。

京都 永田 七郎

大漁の船旗立てて午寝かな

評—中七字まで讀んで此の後へ多分こんな内容が来るだらうと豫想したもの

来ると誠につまらない。こんなのを常

態だと思ひ、陳腐だと云ふ。此の句

の「午寝かな」は意外である。其の

爲めに救はれてゐる。

廣島 小園 邦香

涼しさの冷えてきたりぬ瀧が淵

評—涼しさの経過が手にとるやうに、よ

くわかる。調子もよい「瀧が淵」は瀧

壺の事だと思ふけれども、或は其の附

近かも知れない兎に角良い表現である

今日の事終りし妻の門涼み

群馬縣 訪樂 香風

黄昏るゝ磯まもりて月見草

新宮 奥村 映水

甲板に一人のこりて月涼し

福岡縣 三浦 壽子

活花の見えるすゞしき簾かな

小樽市 福浦 靜江

霧濃ゆき日の紫陽花を妖しめる

横濱市 小宮 昌平

鯛の聲さへそうて風涼し

徳島縣 尾崎 正男

通る人とだえし街の雲の峰

前橋市 堀 金翁

雨あがる地に横たふ栗の花

朝鮮 江 八年坊

豚汁の汗を拭ふもありがたし

會津 齋 藤 瑞舟

庭に咲くものみな白し星祭り

京都市 福島 孝治郎

ガソリンの匂に觸れぬ土用照り

熊本市 牛島 琳平

夕立や女の帯のそらとけし

長崎市 池田 眞三

一人住む比丘尼に暑さなかりけり

小樽市 水 富 宗人

ふり向けば青葉若葉にとらはるゝ

同市 中村 もん

蟬の聲とぎれとぎれに南風

宮城縣 遠 きみ

追はれたる螢の星にまぎれけり

名古屋 友 潤 青歩

大橋の危くゆらぎ五月雨

東京 三野 輪 幸節

蚊帳つるも今年は虫の来ずならぬ

千葉 安 田 九 卓

水うつて歸還の父をまつばかり

満洲國 八 木 茂

水うつてピンといきづく若葉かな

青森縣 佐々木 涼明

梅雨晴の空どよもして編織機

米子市 宮 本 白 士

風車一つ廻りて皆まはる

香川縣 古市 綾子

高きより雨乞ふ神事はじまれる

千葉縣 泉 洋 月

涼風に吹かれてやみぬ蟬の聲

香川縣 日向 法 則

岩うつて流變りし夏木立

靜岡縣 海軍病院 泉 定 一

生垣に隣れる家の琴涼し

桑かきて髪みだれたる暑さをも

假田市 宮澤 榮子

水打ちて遠音神樂を聞きにけり

小樽市 中村 茂 樹

流れ出て簀をせけるトマトかな

山口縣 長 岡 見 智

藤の葉のトンネル潜り清水吞む

飯田市 宮 澤 圭子

君逝きし日の来りけりはぎの花

滋賀縣 重野 ふみ子

葉がりして大きく御堂拜みけり

大分縣 石堂 柑 山 生

茄子鼠の夜の光や夏の月

海軍病院 泉 雲 鳥

岩をうつ波のめぐりて夏の月

朝鮮 大田府 江 八年坊

竹垣に朝顔咲かせ母住める

北海道 清水 陽 子

病室の窓の三日月くに思はする

高松市 妹 尾 綾 乃

我が夫の新盆迎へ参らする

小樽市 平 井 鶴 慈

月天心物干臺に之を見る

投稿規定

官製はがきに一回二句以内
とし「淨土」編輯部併係
あて送ること。

中 支
從 軍

廬 山 遊 記

服 部 覺 善

六月十八日夕刻九江着。スパイが便乗してゐるといふので下船が二時間遅れた。〇〇兵站の案内で指定の宿、増田屋につく。九江占領後間もなく、〇〇〇〇女史が立寄つて此の宿泊所の不便を申し立てたと云ふのでこの人は大變憤慨してゐる。戦地では泊めてもらふことがどれだけ有難い事か、第一線の人々がテントの中で、或は戦壕の中に眠れぬ幾夜かを明すのを見て来た私には、家の中で而も疊の上で憩ふのがどれ位勿體ない話であるか洵に感謝に堪へないのである。

十九日早朝〇〇碇泊司令部を訪れて、先學鹽次一正軍曹を訪ね廬山行きを相談した。丁度今朝こゝの隊が四十名程行つたばかりだ、

それについて行けばよかつたのといふ、惜しいことである。早速三キロ離れた處の〇〇部隊本部に行つて通行證の下附を受けた。處が廬山行きのトラックが無い。こゝに廬山の清流を九江の部隊に運ぶトラックがある。これに乗せて頂き山裾『蓮花洞』手前三キロまで来たが、あとを歩かねばならぬ。山は手に取る様に見えるが歩いて見ると遠い。この廬山こそ、蔣介石が諸將を集めて、あらゆる内外の政策に智腦をしぼつた處である。

この山は山紫水明の地でヒットラーのベルヒテスガーデンに比せらるべきものである。支那名山中の拔群のものである。懸命に歩いてゐると後から空の自動車 came。廬山楚蓮



花洞に行くと言ふので早速乗せて貰つた。聞けば憲兵隊々長を迎へに行くのだといふ。戦線では金はあつても金の用を足さない。運轉手P君に聞くと途中には食べるものがない。頂上の牯嶺へ行かねば無いと云ふ。時計は十二時を廻つてゐる。これから三千五百尺登るのは容易ではない。弱つたと思つてゐるとP君が食糧をくれた。これで元氣つきいよく登山。兵隊さんは親切である。



知らない道を獨りで心細い。入口の衛兵に聞くと籠があるといふので、早速竊むと頂上迄二圓だと云ふ。驚くほど安い。四人が、りの山奥でなか／＼の急坂である。上まで二千五百餘段あると云ふ。親切に説明してくれるのが支那語でサツパリ解らぬ。霧に細雨を混へ眺望は全くなく、たゞ溪流の響きのみ耳に入る。涼しさをこへて肌寒い。竹林、杉林を越えて雜木林から高原、草原を越えて、日光の中禪寺に登る道の様な處を幾度も幾度も越えて、二時間半も登つた所に職ひでぶつ飛ばされてゐる見はらし臺がある。そこで休憩し、パイカン、サイダーを四人の籠かきに接待してやると大變に喜んでホウホウと云ふ。道は不行儀に並べられた急坂の石段である。急カーブを越へると月弓坂に至る。そこが、第二の衛兵所である。通行證を見せる。兵隊さんは圍爐の側で仕事をし、メリヤスのシャツを着てゐる。何

(寫眞は山奥に乗る筆者)

しろ下とこゝでは廿度も温度が異ふのであるから絶好の避暑地である。それより小天地草地坂を左に見て四十分ほどにして牯嶺の町に着く、入口の衛兵所にて通行證を見せ記入の後に初めて通過をゆるされる。

それより二十數段登つた處に一條の町がある。此れが牯嶺の町だ。町幅は約二間半位であるが、支那の町とすれば美しい。三、四丁續いてゐる家數では二百戸程で廬山に住む人々の市場である。憲兵隊は蔣介石の別荘にかまへてゐる。司令部に挨拶をして教へらるゝまゝに宿に着く。今日から開店と云ふ宿だ。支那の〇〇中將の別荘で美しい林間を潜つて大きな二階建の壯麗なる家である。主人初め客とばかりに氣遣よく迎へてくれた。この人が九江増田屋の主人である。増田氏は九江に三十數年住むと云ふ。事變前此の廬山に日本人隨一の立派な旅館をもつてゐたが、日本人の經營と云ふ事ですつかり荒されて見る影も無くなつたと云ふ事だ。彼は餘程變り者である。客だと云ふのに一見舊知の如く開店の祝

とばかりに大變な珍味で御馳走してくれた。

廬山の沿革から概況、物産、氣候、登山道路、名勝古蹟等、實に説く處、其の際限を知らず。

僕は思はぬ所ですつかり知識を授けられて感謝の外はなかつた。此の山には兵隊の外に日本人と云へば女中二人、主人と僕だけだ。憲兵隊長、〇〇司令官附の中尉殿等祝にやつて来る、十二時近くまで話に花を咲かした。

主人の説明で廬山が大體に認識された。明朝を期して見學する事にしてその夜は深い眠りについた。

牯嶺は舊名を長衝と云ふ、その北部に牛頭山の石あるから『牯牛嶺』と呼び略して『牯嶺』と云ふのである。

記

牯嶺は三五〇〇尺の高原で南は女兒城、北

は牯牛嶺の谷門にある、清の光緒の頃(一八

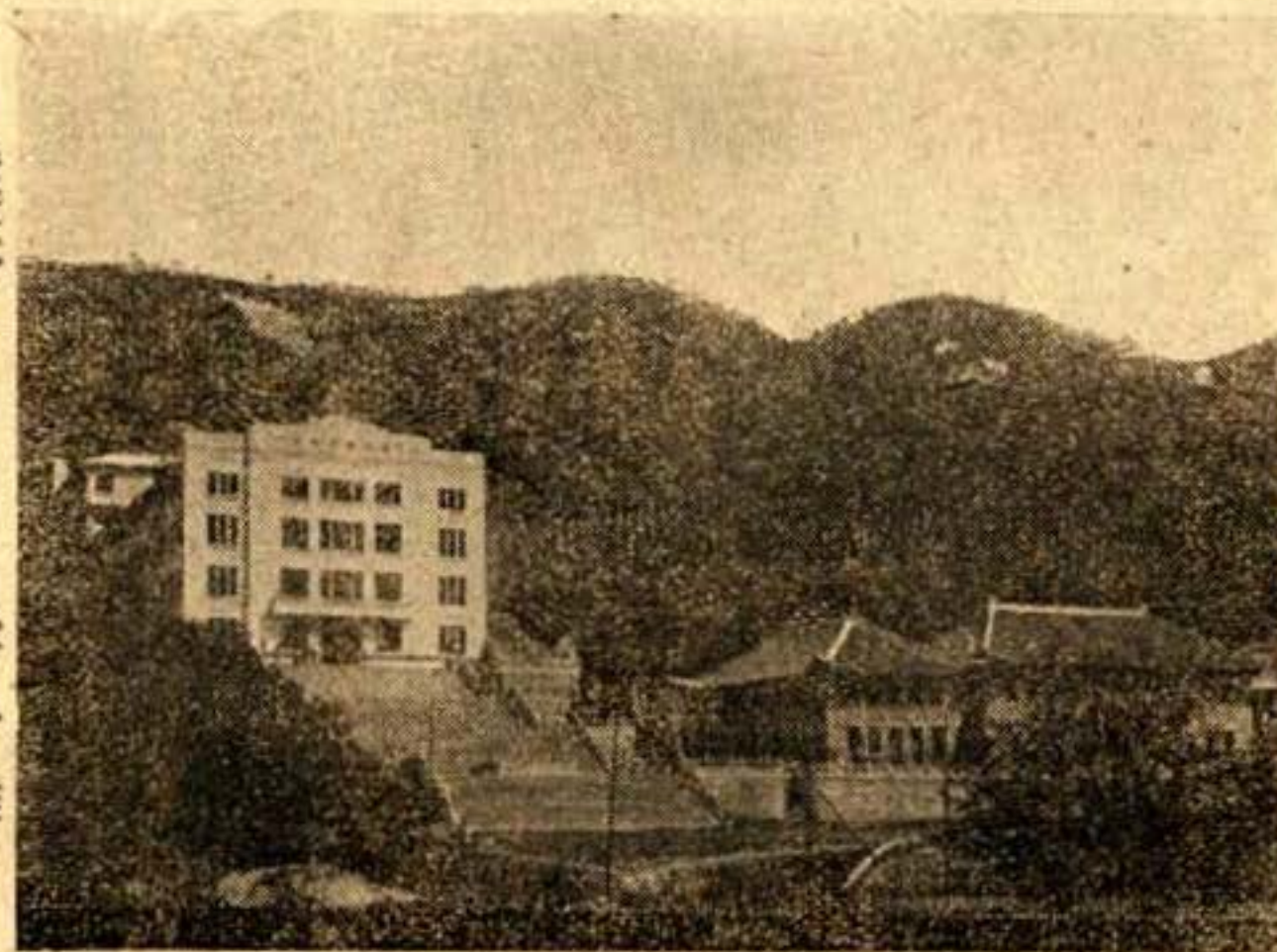
九五)年英國の宣教師「リトル」此の地に避暑にやつて来て山林の勝景氣候の實によい處

より郷人某と百六十金で買収してしまつたのである。處が支那側で「リトル」が英の所有

物にせんと云ふ腹があるのを探知してその買

収を覆さんとする。「リトル」頭として動かす遂に官憲は賣却者を捕へて投獄してしまつ

(廬山の軍官學校)



く日清役の直後で清朝當局では地方官を罷し和平に解決したがこゝを九十九年間の租借地とした。こゝに牯嶺租借地が初まつたのである。

光緒二十三年露宣教師「尼婆」が又「リトル」の故知に倣ひ黃龍寺の僧より廬山の公地若干をあがなふ。地方官の知る所となりて嚴に交渉の結果、翌年牯嶺南側の隙地を贖ふ、南は黃龍寺後方より、北は女兒城後方の山に至る、東は七情居の山脚より西南は猪轡山の山腹に至る廣大なる土地を租借地としてしまつたのである。

民國八年九江縣知事袁延闓が山に登りてこの情況を憤慨し、侵地の恢復に務めて以來、漢口、九江の租界を初め次第に回復され牯嶺の一區も亦支那人の手に還ることになつたのである。蔣介石は此の靈山に眼をつけ、こゝにあまり立派でないが別荘を建て、五、六、七、八の四ヶ月はこゝで政務を取るこゝなつた。一族郎黨の貴族は此の一山に集まり一躍廬山は世界の名山となつた。暑期中共に打



(大 林 寺 附 林)

解けた、内政外交軍事會議等が遂行され排日の作戦も毎日ルートもすべてこゝでやられたのだ。

驚くべし此の山の上にもつて行き四階建の鐵筋コンクリートの軍官學校が建設され、そ

の宿舎は四千人も泊まると云ふこと、立派な圖書館が作られる等、その抱負たるや、實に偉大壯麗と云ふより外は無い。英、米、ソ、すべて、こゝに大官の別荘を建て蒋介石とシヤツ一枚で打解ける外交をしてゐたのに、日本獨り南京の暑い大使館で袴を着て殊に面子を面んずる支那人と外交をしてゐた處に悲惨な日支事變を引き起した原因の一つがあるやうに思ふのである。

廬山は江西省九江縣の南、星子縣の西北にあり、鄱陽湖、その東を繞り、揚子江その北を環り、西は沙河を界して、南潯鐵道が北から南へ走つてゐる、一千米以上の高嶺が重疊して周りが五百支里、層疊疊峰互に高下を爭ひ數百支里より、これを望むことが出来揚子江をのぼる者美峯とさけばざる者なしと言ふ。古人又云ふ「廬山の奇雄」と、實に雄大なる意をあらはしてゐる。よく晴れたる時は九江より山頂の別荘等がはつきり見る事が出来る。

晉漢の明帝の頃、佛教中國に興隆すると廬

山に寺を建立するもの多く、其の數は三百八十餘りになり、その旺盛なるを知る可し、太平天國等の戰亂によつて、大半毀る今存するもの秀峰寺、般若寺、海會寺、萬杉寺、東林寺の五大叢林としてゐるが、多くは大破して昔日の隆盛をしのぶのみである。

廿日午前中大雨の爲に午後苦力の案内で、軍官學校から廬林寺を経て宋子文の別荘、仙人洞、大林寺等を見學す。

仙人洞は道教の寺である、洞の左右には古今の名士の碑文がある。社殿の奥より清水湧出す、渡支以來始めて、こゝにて水を口にす、前方の絶景實に例へば無し萬丈の山千尋の谷白雲開けて眼下にこれを見、閉ぢては雲上の人となる、これより敵兵は本年四月十二日より十三日にかけて、南西の山地に逃れたりと言ふ。附近に彼等が捨てたる衣類等山積しあり、附近に防空壕等その數を知らず、昨年武漢三鎮の陥落と同時に此の邊の攻略は激しかった。南方德安附近は最も我が軍の苦戦をしたる處であるが、此の廬山の山麓も亦その時

分に占領されたものであつたが山頂の町、嵯峨占領は容易でなかつた、敵が百米上で水をくみ我が軍が下で水を汲むと云ふ珍現象が半年〇〇部隊〇〇部隊の勇士によつて四月十二日より十三日黎明に占領されたのである、まだ占領勿々として登山、見學は嚴重であるのは無理はない。殊に外國の權益の多いこの土地の宣撫は又なか／＼六つかしいことである。私共は只涙を以て御苦勞であると感謝の言葉より外はなかつた。

治安維持が保たれりと云ふも何だか顯然たるものがある、皇軍の警備も亦嚴重である。廬山以南の戰闘に於て日本軍負傷者等が〇〇〇〇となつて辛慘をなめたこと〇〇の武器が占領され、これを〇〇されたことは、私共の永遠にわすれてはならぬことである。

又唐宋の名士、李白、白樂天、杜甫、蘇軾、蘇東坡等がこの土地に遊びて書を讀み、詩を作し、人生永遠長壽を願ふたのは皆なこゝである。

宋の初期、白鹿洞書院建立せられ、四方の

學者は此の地に集まり、人材が輩出した、中にも朱晦翁はこゝに朱學を進め又更に隆盛を極めたのである。

仙人洞より歸途、大林寺に寄る、地境の石柱には南無阿彌陀佛としてある、門の兩側に亦南無阿彌陀佛としてある。夕暗迫る頃であつたので本堂を閉めんとしてゐる處であつた寺僧に通じて本堂に参拜した。本堂は聖觀世音である、寺の形式は大體に於て禪の形であるが、支那通例として儒佛道三教混同してゐる點が多い。この寺も亦その規をまねがれず、私が僧であることを通ずると實に愛想よく應接所に案内する。支那には珍らしい、洋館の二階建である。太平天國の役にこわされ、民國十一年今住持が修復して最新の洋式としたのであると云ふ。世界佛教聯合會を設けて寺僧も亦最新と云ふ形である。

筆談であまりよくは通じなかつたが、今夜は宿れと云ふ飯を食へと云ふ、茶をしきりと出す、なか／＼待遇してくれる。「感應篇直講一冊、佛教會々員共修課程」、「總持達喇呢

信仰坐談會御案内

一、來ル 九月十日午後七時ぬより

一、場所 本郷區東片町七八橋本方

善容大學院

電話小石川四九七六

一、講題 阿彌陀經講義讀講

一、講師 中村辨康先生

九月は御彼岸其他の爲前記の如く一回だけしか出來ませんから御繰合せ御來會下さい。

淨き友の會

經、「支那佛教新聞」等の數種を進上さる。

中にも「佛教會々員共修課程」は世界佛教聯合會員の共修する單本にて、香讀より阿彌陀經、施食會、歸依三寶、般若心經、回向淨土願文の集本にて日本に於ける淨土教の色彩が最も濃厚である。

數時筆談の後、退下して宿に歸つた。

(以下次號)



召 集 令

坂 本 節 子

日増しに伸び行く若葉の色も香も咽ぶやうな五月も中のある宵私は例月京都から見えらるゝさる禪師の御法話の席に連なる事を得た。

今日は前座の御坊さんが御二人來られて其のお一人で、たしか長崎の禪林寺の山崎と申された和尚さんの御話し「一昨年の忘れも致しませぬ八月廿五日の夜の事でした。御寺の扉を『山崎さん』と電報です」とほととくと物静かにたゞくのです。何時もの電報なら大聲でとなり起されるのに今夜は何だか少し様子が變だなと思つて、靜かに起きて

「御苦勞さんです」と挨拶して手に取つて見るとそれは軍籍のある二十二聯隊からの召集電報でありました。其時私は別に見榮や強がりを申し上げる譯ではありませんが、少しも卑怯な驚きは心に起りませんでしたけれ共、その電報を見た刹那の瞬間全身の血液がはつと一時に止まりました。きつと其の時人様が私の顔を御覽になりましたらまつ青であつたに異ひありません。それから靜かに寺内一同の者を起して、いよいよ出征の事を話したのでしたが一

と後は從軍中の色々有難い信仰者の實際體得された御話し等あつて最後に一段言葉を改められて「さて皆さん、この召集令は身體が悪くて歸さるゝ事もあり、又すぐ歸還する事もある召集令ですが私等は一度はどうしても更び歸らぬ召集令を受ける事を忘れてはなりません、そして其の時の心構へを修養して置かねばなりません。」と、一同を人生の一大事へと引張つて行つてゆかれた。

歸り途は濠洲の快い五月風に吹かれながら碧巖の講義をされた禪師の其の解かるゝむづかしい眞理とは凡そ反對の幼子の様な童顔を何と無く懐しいものに臉の裏に浮べつゝ家路へと急いだのであつたが、それからしばらくの間は召集令の御話しが胸裡から離れがたいものとなつた。

「そうだ——私達も魂の召集は何時の日か受けねばならぬ。」

何處へ？ それは一片の令狀を頂いて出征する兵士の、至尊の御命令のまゝに何地へも勇躍して征く——丁度その様に、御佛の御心のまゝにである。

此の事に付ては今迄も随分考へて來た事であつたけれ共、そしてそれに對する私の思想も段々變化したけれ共、所詮氣根の鈍い私等に一大事の覺悟なるものが出来る筈もないと言ふ事が判つた位がせきの山である。だから淨土とやらに往るゝか、何處へうまるゝか一切は未知數のまゝに、只御心のまを今生きて行き度丈である。しかし、この御心のまゝに生きると云ふことがまた仲々にむづかしいことでもある。何故なら若し御心のまゝに生ることが本當に出來るなら召集令を受取つても驚かない覺悟が出來てゐる筈だから。



子煩惱

小林 正一

家中、と云つても妻と二人の子供と女中は海水浴に出掛けてしまつた。御主人

の天野さんは今日は一人で留守番である。

子煩惱の天野さんは暇があると子供の相手をして遊んでゐる。たまの日曜日朝から晩

まで子供のお相手をして暮してしまふことに申分のない良いお父さんなのである。然し

そのお蔭で自分の時間と云ふものがすつかり無くなつてしまふ。本を読むとか、シネマを

見るとか、散歩をするとか云ふ時間は皆んなその犠牲になつてゐる。子供が寝ついて、さ

てそれから本でも讀まふかと思ふ時分には晝間の労働の疲れと、子供のお相手をした遊び

疲れとが一緒になつてどうにも眠むくなつて一頁の本も讀めないといふ仕末である。

まだ老人の部には入らないし、青年時代の向學の氣概は多分に残つてゐるつもりなのだが、こんな風な子煩惱のおかげで十年も前手をつけた宿題の研究が一寸も進んでおらないし、社會的にももつとする仕事がある様に思つてゐながら、何一つ纏つたことの出来ないのを、自分ながら齒がゆくなつて、何うかした瞬間に獨りでかつとして仕舞ふやうなことがある。それでゐて矢張り子供のこと考へると家路へ向ふ足が早くなつたり、子供の顔を見るといゝお父さんになつて一緒に遊んでしまふのである。

そこで、今日の日曜には子供達が海水浴に行き度いと云ふのを幸ひに、女房と女中をつけてやることにして、自分は留守番を引受けてゆつくり寝そべつて本でも讀んだり、何か考へて見たりすることにした。子供達は何時

も何處へでもついて行くお父さんが今日にかぎつて行かないのを不思議に思つてお父さんが行かなければ厭だと云つて駄々をこねたが、天野さんは心を鬼にしてへまつたく天野さんにとつてはその位ひの決意であつたのだし子供達をなだめすかしてやつとの事で送り出した。

嵐が去つた跡のやうな座敷の眞ん中に獨りであふ向けに寝そべつてゐる天野さんは久しく味つたことの無かつた「閑寂」を噛みしめてゐると云ふ風であつた。雑音の入つた騒がしいラジオのスキツチ突然切れた時のやうな感じであつた。静かでもあつたが手持無沙汰でもあつた。傍らに横づけばなしになつてゐた新聞を拾ひ讀みしはじめたが、新聞と云ふものにも久し振りでお目にかゝつたと云ふ氣持ちであつた。

ところが、社會面を讀んでゐると下の方に小さく「××子ちゃん溺死」と云ふ見出しで、友達と川へ泳ぎに行つた××子ちゃん七歳が深みにはまつて溺死したと云ふ記事が眼についた。夏になるとよくある不幸な事件の一つである。それを讀んでゐる中に天野さん

は起上つた。

「子供が泳ぎに出かけたすぐあとで、かう云ふ記事が眼に入るのはあんまり縁起がよくない。美江の方は小さいから女房か女中が面倒を見てゐるから間違ひはあるまいが、一郎の奴は亂暴ものだから、一人で沖の方へ出かけて間違ひはあるまいが、……しかし過失と云ふ奴は一寸油斷してゐる際に起るものだから……」

そんな風に考へてゐる中に天野さんは段々心配になつて來た。「閑寂」の中に雜音が入りはじめた。

思ひ直して散歩することにした。切角何年振りかで獨りきりになつたのに、つまらぬ取り越し苦勞をしてゐては何んにもならない。通りへ出ると間もなく、買ひ物の歸りらしい大家さんの奥さんに出逢つた。

「おや、お獨りですか」

とめづらしそうに聲をかけられて天野さんは苦笑して頭を下げた。

「そうですか、皆さん海水浴で。結構で御座いますわ。」と奥さんは立止つておしやべりを

始めた。「でも、小さいお子さんはお氣をつけにならないと、耳へ水が入つてよく中耳炎を起すことが御座いましたね。家の娘の學校友達で、つい先達中耳炎でなくなつた子がありましてね。矢張り海水浴からでそうで御座い



ますよ。」

「へえ、中耳炎でそんなに恐ろしいものですかね。」

と天野さんは眞剣な顔をした。

「でも、そんなことは滅多にございませんでせうけれど」

奥さんは天野さんの眞剣さに些か恐れをなしたらしく、早々におしやべりを切上げた。天野さんは散歩にも身が入らなくなつてしまつた。そうだ、中耳炎には氣がつかかなかつた。耳に栓をかへと云ふやうな注意をしてやらなかつたし、女房もそんなことはうつかりしてゐる方だから……心配になつて來た。溺死の新聞記事に中耳炎の話、どうも氣になることが重なり始めた。矢張り自分が付いて行つた方がよかつた様だ。——そうだ、出かけて仕舞つてからぢや間に合はない。——そう考へるとちつとしてゐられなくなつた。

二時間後には天野さんは子供達のゐる管の海岸の人混みの中で、いさゝか血眼の體で家族の者達を捜してゐた。

「やあ、お父さんだ、くく」

と眼ざとい子供達はお父さんを見付けて飛び付いて來た。

「まあ、お父さんが。矢張り來たのね」と天野さんの奥さんは子供のうしろから笑ひかけた。天野さんは女房にすつかり腹の中を見透かされたやうでいまい／＼しかつた。(をはり)



皆、い、事！

中野 尅子

水道の栓をヒネルと、ヂヤツ
ーと水が出るように、いつも、
スグと、自分の中から如來さま
が走り出して下さるのでなくて
はいかぬ。

ドコに在るか、無いか、わか
らぬような佛ではなく、

ココに御座る——いつもココ
に居て下さる——といふて、腹
を叩いて自慢せられる「如來さ
ま」でなくてははいかぬ。他人の
佛様でなく、自分の佛様なら、
自分に居處のわからぬような筈

はない譯です。それが、大抵、

信仰してゐる／＼と云ふても、
人から聞いたまゝを、信じてゐ
るような氣持になつてゐるだけ
が多いものだから、信仰してゐ
るやら、してをらぬやら、わか
らぬような信仰です。だから、
わかつたやうでわからぬ信仰の
中へ首を突込んで、自分にも困
つてゐる事が多いのぢやない
か。

信仰といふのは、肚の中から
「オイチ、二ー」

「オイチ、二ー」

と歩かして行つて下さる「如來
さま」を持つてゐるといふこと
です。「右向けー右」「前へーオ
イ」

「田の草取れ——田の草」

「ハンマー取れ——ハンマ
ー」

と、内から命令して、右するも
の左するものも、出るのも、入
るのも、指圖して下さる「お念
佛」を持つてゐるといふことで
す。

すれば、「突込め——突込
め」で敵陣へ突貫して、敵を
殺すのもお念佛なら、車曳くこ
とも、お經讀むことも「お念佛」
です。

お念佛が、内から催して來て、
一にも二にもやらして行つて下
さることが信仰です。

「如來さま」は死んでゐる方で
ないから、いつも、活きた働き
をさして下さる。「お念佛」は死
んだ唱へ言でないから、稱へて
ゐる内に、生きた躍動を感じ、
生きた聲となつて、生きた活動
を起こさして下さるのです。

常に、活潑に。前進、前進。
一步は一步より高く。一步は一
歩より勢よく、向上して行く
ことであります。

日本國民として「陛下」を信

ずることは、「陛下」が常に、我が衷心にゐらして、命令の主體となつて、私を使つて下さることとであります。そして私は、常に、その「み聲」を聴いて舉止せられることとあります。だから、死ぬのも陛下が共に死んで下さり、戦ふのも、陛下が共に生きて戦つて下さればこそ、い

つ如何なる場合も、全力を賭して、吾が身を捧げ、吾が身を獻じて行けるのです。

吾が如來は、吾が内に居られ、我れは亦、吾が如來の内に居り、

我れと如來は一
如來と我れとは、常に一であります。

めるのだから、苦しい時は、苦しいが儘で、苦しんで行くことがたのしみであり、楽しい折には、その楽しみを何十層倍に楽しめる。

主人を亡くして寡婦となられた奥様が、幼兒を抱へて十幾年、六つかしい姑に仕へて、今に苦勞な生活を續けてゐられる。其の顔に

「せめて、主人は亡くとも、此の中風の姑様まで無かつたら、手足纏ひもなく、又心勞もなく、どんなに家庭の中も、樂か知れぬ」

と、いふ色が見える。それで私が、
「奥様、姑様が亡かつたら——
と思へやしませんか」

と、意地悪く訊ねて見た。「ハイ——」と答へてゐられる。

「奥様、その姑様が無かつたら、アナタの進歩は止まりますよ。アナタに喰ひついてゐて下さる厄介種子の姑様が、アナタの如來様です。尻から押し上げて下さる機關車です。坂が急だと、汽車の機關車が、もう一つ後について押し上げて呉れるでせう、あのよう、アナタに取つて一番惱みの種子が、アナタの後押し機關車です。

誰しも、コレ一つが無かつたら——と云ふ病患があります。此の病患こそ、我れを囑まし、我れを目覚まし、我れを鞭打ち、我れを向上さして下さる菩提の種子です。

此の借金が無かつたら——

此の病氣が無かつたら——
此の道樂息子が無かつたら——
此の勤めが無かつたら——

と云ふ——「無かつたら——」が、一番いゝ良藥です。此の苦勞の種子があるから知らずく努力し、居睡りをせずにあるのです。「此の一つ」が無くなつたら、スグ墮落する。此の惡病が如來様であつたのです。如來様の變化です、權化です。お念佛の出て来る湧き口です。さもなくかつたら、我々は直ちに地獄に沈んで了ふ。

我々は、不幸は嫌ひ、幸福は好き。幸福ばかりの「極樂生活」になりたいと思つてゐます。だから、

「如來さま、いゝ嫁が授かりま

して、有難う御座います」

「如來さま、息子を無事で歸還さして頂きまして、有難う御座います」

と、都合のいい時には、美しい感謝を捧げてゐるが、病氣をしたり、損したり、家が丸焼けにでもなると、仲々、感謝がして居れません。感謝がして居れぬどころか、愚痴や、怨みが出て仕方がありません。

結局、感謝してゐても一時的喜びで、本當の「感謝」ではありません。「本當の感謝」でないから、すぐ次ぎに怨みや泣言に變つて、悲しみが来る。そんな喜びや悲しみは、何百遍、何千遍、一生繰り返へしてゐても何の役にも立たぬ。信仰は、そんな一つ事を、ク

ダ／＼繰り返へして一進一退、

一つ處で足踏みをしてゐることではありません。クモの巢に引懸かつた小蟲が、いつまでもバタ／＼バタ／＼と一つ網で騒いでゐるのではいかぬ。そんな「クモの巢」をプチ破つて、飛び出すことであります。

そして病むべき時なら病む事もいい、損する事も非難される事も、縮居る事も、本當は——

いゝ事です。一切を「いゝ事」「いゝ事」として、それを踏み臺として進む。雪達磨が、轉がるに従つて石も瓦も、蜜柑の皮も、犬の糞も、その中へは丸め込まれるだらうが、結局、それが一塊りになつて、大きい雪達磨になるように、總てを包含して新運命の開拓をなし、總てを

よき素材として、これを溶解し、これを統一して、新しき自己を創造して行くこそ信仰です。

アレは厭や、コレは嫌ひ、ソレは喰べれぬ、コレは口に合はぬと逃げ廻つたり、押し遣つてゐると、いつの間にか榮養が不足し、衰弱して斃れて了ふ。信仰は飛び附いてゞも取つて喰ふことであります。買つてゞも苦勞することではありません。

世の事は、一つとして如來さまの「み心」の籠つて居らぬ事は無いのだから、必ずや以て益し給ふ、必ずや恵み給ふ、必ずや救ひ給ふ——此の「恵み」のわかるまで沈潜し、親和し、歸投すれば、必ず地獄の底にも、生きる街道のあることを發見する。そして處として「光明の土」

座禪と念佛

吉田英一

坐禪は多くは自からの力を信ずる者がなし、念佛は多くは自からを一文不知の愚鈍の身になして、不思議にもたすけられてゐる自己を喜び、唯最善を盡して其の結果の如何は、ほがらかに神佛に任さんとする人がなすのではないかと思ふ。

前者は無の境地に到らんと努力して、而も多くは其の境地に到り得ざるを歎く。假令自からは其の境地に到り得たと自負するも、「無の境地に到り得た。」と自負する所、それは己に無ではない。念佛する人は、無の境地に到らんとするが如きをこがましき心はなくて、唯一杯の麥飯、一

ならざるごとく、そして空氣なき處にも呼吸し、闇黒の中にも、五彩の燦きを見る。そして、悲風吹き荒ぶ人生の



一心淨土

故清谷閑子女史のこと

生田花世

曠野にも戦へば戦ふほど、闘つて生きる妙味を感じ、一事は一事より熱意を以て鑒み、意氣を以て當り、そして、ますく永いふものでせう。

秋になると、澄み渡る月を見て、しみじみと世を去りし八がしのばれて来る。これが、昔からの人情である。いかに、古めかしいと云はれようと、百年、千年、人情の、かうした方面にはさうひどい變化があらうとは思はれぬ。

皎々と照り牙ゆる月をながめて、戦場で夫を失つた妻は、ありし日のなつかしい逞しい肩付を戀ふるであらう。飛行機で、子を失つた老父母たちは、月を淨土と見て、やがて相逢ふ日の近いのをぞむであらう。

おもひ、次々に、故人となつた男女の友人、知人を、白い光の中に描いては消し、描いては思ひにつなぐのである。今年の秋は、かうして、私の、月の鏡におもひ描き、その眉をおもひしのぶ女の友が二人ふえた。一人は岡本かの子女史であり、一人は、清谷閑子女史であ

枚の破れ衣も皆之神佛の恵なりと感謝し、多生曠劫を経て、生れ難き人界に生れ、無量億劫を送りても、遇ひ難き此の聖代に遇ひ、世界の科學者を動員するも、到底成し得ざる自然(神佛)の恩恵に感激して、唯幼兒の如くになりて、念佛をなす。無にならうと思はずに念佛して、無にならうと努める人よりも遙に無になり得て、而も自からは無になつてゐることに氣附かなくて、唯其の妙境に坐す。故に其の人の顔色は美しく和らぎ、其の人のなす一呼吸も法悦に浸り邪見傲慢の色は御塵も無く、其の人の言動には些子たる不満も不平も無い。雨を愛し風に親しむ「日々是好日」の尊き姿は、却つて念佛行者の中に多く見出される。併し斯く言ふからとて決して

る。奇しくも、二女史とも、數少い日本女流作家の佛教に造詣の深いお方であつた事で、二女史を失つたあとに、さて、誰をこの二女史の代りに考へていいか、わからないだけに、佛教文藝の上から見ても損失尠少でないものである。

故岡本かの子女史については、かつて、「淨土」誌上に、その思ひ出を書かしていたといふた。で、こゝには、主として、清谷閑子女史について、二三のことを述べさせてもらひたくおもふものである。

昭和十四年三月二十四日逝去の清閑院釋好諦大姉は御年は五十一歳、丑歳であつた。五十一歳といつても、打見は、四十六七歳位にしか見えぬ方で、いつ

も、舉動活潑としてゐる婦人であつた。「活潑」なんて、變なひ方だとおもはれるかも知れない。しかしこんな新しい語を私におもひつかせるやうなピチピチした表情でもあり生き方でもあつた方である。

『あゝさうですか……』

かうハギレよく云つて、ニコニコと、小さい口元で笑つて

『丁度よかつたですね。のりましたか、どうかと心配してたんですが……』

女史は、私の原稿の事をよく心配してくれて、この「淨土」への寄稿も、女史のおきもいりから時々、私の小稿がのつてゐるやうなことである。

女史を、私が、その本名杉本正生の御名で知つたのは、二十

數年前の「青鞥」誌上の小説からであつたが、御交際は、其後十數年ののち、今からかぞへて、わづか六年ほどまへ、女史の長篇小説「不死鳥」が、東日の懸賞に當選して、その祝賀會を新橋で開いた夜から始まつたので、古い友人の多い私の友人録の中では比較的新しいカードのお名である。

二

交遊の最初のおもひでは、故人と、小寺菊子女史と、北見志保子女史と、この頃賣り出しの女流作家、田島準子女史、大田洋子女史故人となつた小城美智子女史其他四五人と私とで、小説研究の「文藝フォーラム」といふ小さい、しかし、親しい交りをする會を作つた事からで、

坐禪を貶めるのではなく、人と時とによつては、より多く、より深く其の價値を認めるのである。又茲に言ふ念佛とは、唯「南無阿彌陀佛」のみを指すのではなく、「南無妙法蓮華經」も「南無大師遍照金剛」も「南無八幡大菩薩」も又キリスト教の祈り等も含めてゐるのである。私は思ふ、自力もよく又他力もよい。時にはよりよき坐禪のための念佛もあらうし、又時には、よりよき念佛のための坐禪もあらうと思ふ。難業と易業とに區別はするが、時には易業が難業よりも難なる時もあるやうに思ふ。念佛は易業といへば易業であり、難業といへば難業である。先日徳島公園にて、春風のまに／＼に美しくまふセルロイド製の風車の土産に購いて、春風に、美しくまふ風車。

月一回づゝ逢ふ事にした、その三回目頃が、女史のお宅で催された時のことが一番さきに頭へのぼつて来る。

女史のお家は、植木屋の中にあつて、所狭きまで、そこら中に、濡木の鉢が大小何百とならんでゐる間をとほつて、女史のお家の玄關にゆけるといふやうなことであつた。町は、やはり、往年もおくらしになつた杉並區下高井戸附近であつた。

その日、夕方にかけて、一同は、よく語りよく遊んだ。お嬢さんの杉本かほるさんのお手料理も出て、みんな、たくさん、いただいた。

清谷さんの話しつぷりは、サツと吹く五月の青嵐、あんな調子だつた。どんなむづかしいこ

とでも、清涼に云ひ切り、解決的にものいふ傾向であつた。

ところで、この日にきいた女史の話が、奇しくも、他の多くの面接の時の話を凌駕してもつともつよく、私の頭には、よみがへつて来るのである。それは終にのべる。

話しぷりは、次の事が一番、ビチ／＼と女史の音聲を感じさせる。

場所は、牛込の、私の家の近く——矢來下のいであやといふコーヒーバーラーの卓にむかひあつての時、詩人、山之口獺といふ鼻の高い、眸の涼しい詩人が同じ卓の偶然の客だつた。

山之口氏は、私の知人で、琉球の産である。女史は、特色ゆ

たかなこの詩人に、心からの共鳴を感じたらしく、話は、いろいろの事に渡つて、おもしろく展開して行つた。どんな人でも、興にのつて話す清谷女史の話しつぷりには、吊りこまれて了ふ……女ながらも談論風發！これが、清谷女史の特徴なのだつた。

『あなたは、寅歳ではないですか』

と女史は、山之口氏にきいた。そのきゝ方が、とても、嬢さん風の、サツパリした調子だつたので、山之口氏は、

『さうです。僕、寅歳です……』

『寅でせう……どうもそんな感じでしたんです。私は、寅(虎)はきらひでしてね……』

(山之口氏まごつく……)

『虎は、おどしは、大したものですが、どうも、單純で淺薄で……あの加藤清正のやうな感じで、單純で……』

『そんなところもあるですね』
私は、こんな二人の會話を面喰つてきいてゐた。山之口氏を見ると、一寸まごついたものの、本當の所信を語る女史の忠實のよさを見受けないやうな低い詩人ではなかつた。たのしさうにへんじをしてゐた。

三

最後に語りたいのは、もつとも私に深い感銘をのこし、女史なきのち、高く懸つて、私の心を啓發するあの話である。植木屋の奥のお家で初期の交遊時代にきいたあの話である。それは次のやうな言葉から始められ

た。

——私は、四年ほどまへ、大病したんです。かうして、なほつてゐるのが、不思議な位の大患でした——。

それは、胃腸病らしかった。くわしくはきかなかつたが、十二脂腸の病であるらしかった。

とにかく、東京社の婦人畫報記者九年ののち、「月見草」といふ長篇小説が、大阪時事新聞に、當選したのちのことらしかった。

ドツと、女史は、大患の床につかれた。高熱はつづき、食事は口にすべくもない、病状は、日ましに、悪化して行くので、女史も心中、種々の大憂悶を抱き、時に生死について、切實に、なやみ抜いた。手術をしなくてはならなかつた。しかし、手術ま

への病状は、脊髄を板に牽でしぱりつけての絶對安靜の十數日を經過しなくてはならなかつた。何しろ、お腹の中では、十二脂腸が、グラグラと大騒動中ののだから、身動き一つしてはいけない。ちつとしてゐなくてはならない、この異様の高熱から来る鈍痛、疲勞、めまひ、かわき、さうしたものの複雑にからみあつた病の巢を、女史は宛も重荷をおつてゐる牛が、つながれて、少しも歩めないかの如く、ちつと板の上に臥しつづけたのである。ことによつては、そのまゝで、靈魂ばかりとなるかもしれないといふ危急である。知らすだけの人には、危篤といふ事をしらした。そしてから、佛教歸依の人だけあつて、

この生死の大關門の中で心がけといふやうなことに、心は、たどりつき、これまでに、かれこれ修業して來た佛教上のいろいろな智識が、あちらに一山、こちらに一山、おもひおもひに群落してゐるのを、わづかにのこつてゐる思念の力で、ちつと、みつめた。たまたま、身體は動けなくても、頭腦の澄んだ瞬間々に、そのあちらの二山、こちらの一山を、心の鍛で、耕し、もちほこび、もり上げ、ならし、又、ほりかへし、新しい形にしては、連絡をつけるべく、憂念をつづけ、觀念を持久的に、長く長く引きのばしたのである。十數日ののち、手術後の經過良好——めづらしく、こんな患者として、十人の中十人夫で、

その休養のために一命を失ふところの病熱と、テンテンの身悶えから發する局所の不調とが、不思議や、女史の際には少しもあらはれず、局所の回復は、何の支障もなく、だん／＼に癒えて行き、女史の生命はつひに救はれた。

『佛教上のことや、生死のことを、頭でかれこれ考へてゐると、それが主になつて、病のことを忘れたのが、よかつたらしいです……一心に信仰上のことを考へたゴリヤクでした……』と、潤然と女史は微笑したが、この一心淨土の妙諦！私を導くものこの例以外にあるべからずと私は、心耳を澄まして深くも聴き入つたのだつた。



與海軍病院 林 良一

友は亡しわれは白衣に身を包み
共同葬に逢ふが悲しき

評 同じく戦地に出て、友は名譽の戦死を遂げ自分は武運拙く病むか傷つくかして故國へ歸還し、今日友の合同葬に逢ふ感慨を叙して無量の哀愁をのべたる余韻深き作。

帝國陸軍病院 平山新志

天地の恵みたりとし白百合の活け
たる薔ひらき初めたり

評 切つた百合の薔を瓶にさして置いた花が開いたと云ふ、何でもなささうなことに作者はハツと驚いて、その薔のひらく後に天地の大きな恩寵を感じてゐるのである、素直な喜び切つた心境でなければ到底この感は出ない。

京 都 永田七郎

浮びては口笛を吹く海女の群れ伊
勢の安乗の海は眞青し

評 爽やかな夏の海とそこに働く海女の最劇たる活動躍如。

前橋 藤澤金翁

雲の端に光りとめてけふの日は
永遠の過去へと流れ入るかな

新宮市 奥村映水

土用波心して寄れ熊野なる孤島濱
木綿今盛りなり

飯田市 宮澤榮子

風趣の裾の家々陽おほひに南瓜の
花の盛りなりけり

東京市 小山静金

夕月にけしほろくと散りにけり
若くて逝きし我妹に似て

津市 森山 隆

君が子は炊き双手合すなり夕日の
隣に骨を埋むる

秋田市 山崎 麗華

征く時のたけき姿も思ほひて遺族
ら泣かん遺骨かへる日

滋賀縣 福島文子

戦場の武勲は露も告げまさず銃後
の我をねぎらひたまふ

北海道 花田 蘭作

八百萬の神守り給ふ日の本は戦ふ
毎に勝たざるはなし

小樽市 中村もん

稲田ふく風に花粉のこぼれつゝ垂
穂の波のつく夕ぐれ

大阪市 松尾いく子

見る人の顔に青葉のうつりけり五
月なかばのみのもおくやま

満洲 八木 茂

法の道只貴しと思へどもなほみた
されぬ我心かも

秋山縣 松尾 榮道

今正に入らむとすなる夏の日に映
へて入江の美はしきかな

小樽市 中村 茂樹

世の移り日々すゝみゆく代に生れ
生きがひあるを渾々思ふ

函山市 渡邊 明道

大陸にいざ出で征かん吾が友の雄
々しき魂た導れつゝ

北海道 寺田 嶺山

老いて猶すこやかなりと讀へらる
ほどの年とは我れおもはねど

高崎陸軍病院 渡邊 清

あへぎつゝ昇る山路のけはしけれ
しばしむすばん岩間の清水

東京市 三野 輪幸節

童らはははづき提灯みなもちて英
靈むかふ黄昏の道

堺市 木全 澄也

朝な／＼一枝たをりてこの頃はわ
びしく咲けるコスモスの花

宇治市 里野 智雄

法の道ひろめんために師の君は老
ひたる身もていづこにまさん

横濱市 小宮 平堂

あしの湯や山路を行けば木々の中
にひとときは高し鶯の聲

滋賀縣 吉岡 峰月

家を思ひ國を想ひて病むわれは凱
旋の人怨めしくなりぬ

投稿規定

官製はがきに一回二首以内
とし一冊土一冊郵部歌壇係
あて送ること。



明日と青年

大日本青年團
常任理事

栗原美能留

事變第三年を迎へて、茲に東西新秩序建設の大道は倫と明瞭にされねばならぬ。

私は青年の使命について語り、興亞の大精神は青年に俟つて始めて完成される事を力説したい。

青年は常に時代の主動力でありながら、平時に於ては大方、無軌道、放縱、懶惰の譏を受け勝ちである。

それは、青年の熱情、正義感、熱力が、世界の舊秩序の不當さに對する憤懣から、逆にあらぬ方向にと發揮され、放縱、怠惰の非難を受けるのであらふが、先達による

しき指導と理解を缺く事も又論を俟たぬ。

固より青年は未完成であり、未完成である。問題は、大和民族の使命觀に感激するか否かに餘る。

よし未完成であらふとも、又半成にして終らふとも、我らは民族生命體の最も力強き清新なる部層を好むと好まざるとに係はらず今後次々と代表し、世界に向つて具象化して行かねばならぬ。

青年の使命はこゝに到つて益々重大となるのである。

事實、今や東亞再建の大聖戰に於ける

青年の活躍は實に目覺しき限りである。世の青年に對する無理解と無指導に對する無言の抗議と言はねばならぬ。

前線に、銃後に、青年の力によつて、始めて新日本の建設があり、興亞の大精神が高揚されるのである。

日本は大いなる轉換期に直面してゐる。

我ら青年はかゝる見解を深め、國運進展の礎地を形成する所の我ら青年自體の修練をば、この時局認識に即せしめつつ、青年層の總能力を擧げて國家の要求する處、民族生命の發露の求むる處に向けんとして來たのであるが、今や又百尺竿頭更に一步を

進めねばならぬ段階に到達した事を痛感せざるを得ない。

即ち、青年團の全國的組織の態様を整備し其の組織自體一段と強化擴充して、青年團の動向其の儘が當面する大和民族の一大發展の動向を規定し、東亞新秩序の性格や内容を具體化する底の堅確精緻なる統制團體たる實を擧げねばならぬ。

之らはもとより、青年の自覺に俟つて始めて實現されるものである。

×

然るに明治の世代、特に日露の役を劃期として、日本は世界の舞臺に登場し、半世紀を出ずして一等國の榮位を捷ちえたのであつた。

かゝる優位と順境に恵まれるに到つて、青年は次第に奢侈、放縱、安逸に流れ、功利的思潮にうつゝを抜かず傾向となつた。尊き國體の組織原理を忘れ、本來協同體であるべき日本の國家の中に迄階級闘争の

波が押し寄せさへするに到つたのである。

即ち唯物文明に優れたる歐米をば徒らに尊敬するあまり其のあさましき個人主義、享樂主義の魔藥を好んで、道の國日本に注射した爲である。何たる愚、何たる痴だ！萬邦無比の神州を築き上げた我らの祖先達に向つて何と申し譯すべきであらうか。

かゝる風潮に對して、今ぞ我らは敢然として立ち上つて、神州日本青年の總力を發揮し、不動の國是、堅國の皇謨を内外に顯現させねばならぬ。

×

私は官界を去つて、青年團に奉職する様になつたのであるが、官界にゐた時より國體の尊嚴、國家の有難味と言ふものを感じてゐる様になつた。

それは滅私の精神、奉公の實踐に於いて青年にのみ與へられた純情に接するからである。

官界こそ滅私奉公忠誠なる陛下の側近の

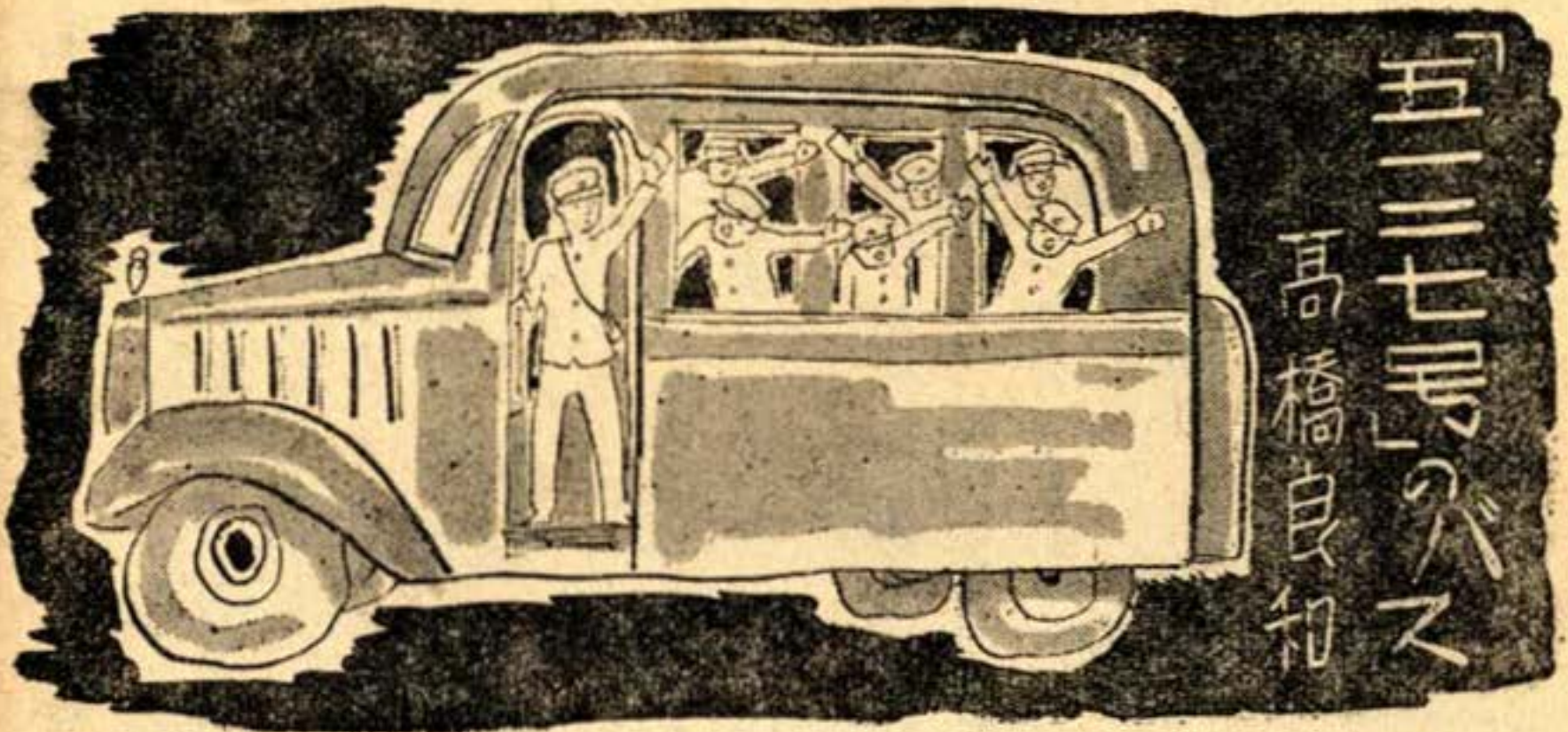
臣であらねばならぬ筈であるのに、必ずしも左様でない傾向は嘆はしい次第である。

自己の榮達をのみ求めて、拔げがけの功名を競ひ、虚偽を平氣で行ふ小惻怛な便宜主義の横行に私自身氣を腐らせて御奉公の實を擧げえない悔が如何に多かつたか。

現在我ら青年團と文部省との間に於いて、學徒隊の編成について、意見の相違を來してゐる事など、時局緊張の際に於いて誠に恐懼に堪えぬ次第であるが、眞に神州日本の青年指導の實際に當つて、官廳の一時、思ひ附きの政策に對する青年團の歴史ある教育指導の本義を強調し、形式的訓練の反省を促す所以である。

×

青年日本の曉の鐘は鳴り渡つた。隋眠を貪つてゐる時ではない。あたら大陸に散つた同士の血潮に對して大日本建設に、東亞新秩序の再編成に、今や我らの身命を捧ぐべき秋は來たのである。



街角に「少年車掌募集」の廣告が貼られたのは、お父さんの出征後、まだ間もないときでした。

「お前だけではどうしても一人前にするのだ」とあんなに力んでゐたお父さんに對して申しわけがないと思つたのでしたけれども、お母さん一人のくらしを思ふと、自分もなんとかして手助けしようと思つた雄三は、「僕さへ思ひきればいゝんだ」と覺悟を決めて、そのことをお母さんに話しました。

「まあお前が少年車掌ですつて」

「ウン、僕どうしてもお母さんの手だすけをしたいのです」

「そりやありがたいけれど、お父さんがね、あんなにおつしやつたのに」

「そのことなら、僕お父さんにおわびするから、ねえ、お母さん」

と、あまりお母さんにたのむものですから、お母さんも、

「そんなに云つてくれるのなら」と、とうとう許して下さいました。

「僕だつてきつと一生懸命に働きますよ」

と、お母さんの前で雄三は強い決心を示すのでした。

それから間もなく、驛前から海岸通りまで、新型の車體の大きいバスが通ふ様になりました。銀色に青い線のは入つた車體が、せまい街角を横切つて行くときなどは、まだ見なれない街の人たちはその恰好に見とれてゐるだけでした。

「バック／＼オーライ」

と、この間うちまで練習場で稽古してゐた雄三も、もう立派に金ボタンの服にチヨコンと鞆を斜にかけて大型バス「五二二七」號の助手席に座つてゐます。

小さな／＼停留場でバスがとまつて

も自分のかける

「オーライ」

と、云ふ聲で、あの大きな車が動くのだと思ふと、自分が少年車掌になつたことをほんとうにうれしく思ひました。

「どの停留場でも乗降客があればいいのに、そうすると僕が聲を掛けられるから」

と、獨りでこんなことを思つてゐる雄三でした。

はじめのうちは、切符の字をみなければ上手に行く先にパンチを入れられなかつたのが、五日たち、十日たちしてゐるうちに、もう切符をもつた感じで、どこでも自由自在にパンチを入れることが出来るようになってくると、得意なもので、「オーライ、バック」の聲もすつかり落ちついて來ました。

いつもの様に、このバスが驛前を出發して工場前にきたときです。カーキ

色の作業服に身をつゝんだ一人の少年が乗つて來ました。空になつたおべん

とう箱をかゝへて、坐席に席り

ますと、いつもの様に切符を切りにいつた雄三をみる

なり、

「おや雄三君だなあ」

と、大きな聲でいひました。

あつけにとられた雄三がちつとその少年をみると、それは同級の健作でした。

「ナーンだい、健作君か、

君何處かへ行つてるの」

「僕、今乗つたところね、あの菓子工場につとめてゐる

んだよ」「工場つて」

「兄さんがつとめてゐたんだけれど、今度召集されたもの

だから、僕がね、その代りに使つてもらつてるのだよ」

「君もかい、僕だつてお父さんがね……」



と、お父さんや、兄さんを戦線におくつたこの二人の少年達はすつかり話が合つて、バスの中を忘れて話合いました。

「あのねえ雄三君、僕と君の外にまだく兄さんや、お父さんを戦地へおくつた同級の友達があるかもしれないよ」

「そうだらうねえ、一度みんな集まればきつとお父さんや、兄さんの手柄話が聞けるかもしれないよ」

「面白いなあ、ちや僕一度調べてみようか」

「ウン、君忙しいだらう」

「でも、そんなこと位出来るよ」

「ありがたう」

と、話してゐる間に、バスは「鳥居前」の停留場に止まりました。

「ちや屹度お願いするよ、そしてね、みんなの名がわかつたら十四日の五時にねえ、ほーら野球場のベンチに、集

まることにしよう」と、雄三と固い約束を交した健作は急いでバスから降りて行きました。

「きつとよ」「さようなら」

と、別れたこの二人の少年達は、お互ひに姿がみへなくなるまでふりかへつてみてゐました。

それから暫く日がたちました。雄三と固く約束した健作は、同級生の出征軍人の家を調べました。

そして十四日の午後五時、約束した野球場のベンチに集まつたのは、雄三、健作を加へて、九人の子供達でした。

「僕とこのお父さんねえ、この間敵前上陸したんだつて」

「僕とこだつてそうだよ」

「僕の兄さんなんか、戦車隊なのだから随分勇ましいよ」

「そうだらうね、あんな大きな鐵のお城の様なのが動くんだもの」

「それに彈丸なんかハネ返すんだつて」

と、少年達はみんな勇ましい手柄を稱へました。その中に交つて、さつきから一つもしやべらない少年がいました。それは良夫でした。

「良夫君のお父さん、今何處にゐるの」と、こう雄三にきかれて良夫は、ドキツとしました。

「ウン僕んとこ……」

「何うかしたのかい」

「……」

「ナアーわからないぢやないか、みんなに云つておくれよ」

「……」

「なあ本當に」

「でも……」

「ねえ云つてくれよ」

「僕のお父さんね、もうずーと前だけど手榴彈のために右手をやられて町の



軍病院にかへつてゐる
のだよ」

「そんなことが君云へ
なかつたのかい」

「でもみんな。お父さ
んや、兄さんが手柄を
立てゝゐるのに」

「戦死した兵隊さん、
負傷した兵隊さんもみ
んなみ國の爲めだ」

「そうだともし」

「僕達のお兄さんや、
お父さんが無事である
ことを喜ぶと共に、一
つ良夫君のお父さんを
慰問しようぢやない
か」

「そりや、いゝことだ
けれども、軍病院つて
随分遠いだらう、歩い

て行けるかい」

「そうだなあ、困つたなあ」

と、折角相談が出来た慰問の話もこゝ
でハタと行き詰りました。

するとさつきから聞いてゐた雄三が
「それなら僕がなんとかするよ、僕と
この會社の課長さんにお願ひしたら、
ひよつとすると、バス一臺出してくれ
るかもしれないよ」

「そんなこと出来るかしら」

「ウン、みんなで慰問に行く」と云へば

「そうだな、ぢやそれは雄三君にお願
ひして慰問品は」

「慰問品なら、僕とこの會社の主任さ
んに話して菓子ウンともらつてくるよ」

「おや／＼いゝことばかしだねえ」

「きつと／＼みんなの眞心が通じてう
まく行くだらう」

と、話はこんなふうまく／＼みました。

「それでは今度の日曜日の晝から矢張

りこいでみんな集まらう」

「ウンよし」

と、仲のいい子供達の聲が青い空にひびきました。

こうして集まつた子供達は次の日曜日をどんなに待つたことでせう。

裏庭のお花をつんで、

お小使を残して飴玉買つて、

クレオンで圖畫をかいで、

小さな眞心を捧げる少年達が、慰問

品をかゝへる様にあつまりました。健

作もゐますし、その中には良夫もられ

しそりに交つてゐました。

「それにしても雄三君は遅いなあ」

「あんなに云つてかへつたのだけれど

も、バスがうまくいかないのかもしれ

ないぞ」

「課長さんがきつと許してくれないの

だよ」

「そうかしら」

と、みんな心配してゐる最中、埃の中をかきわける様に一臺のバスがやつて來ます。

「やあ、あれだく來た、く」

と、みはりに出てゐた健作君が云ひますと、みんな伸びあがる様にその方向をみました。

だんく近づいてくるとはつきりわ

かつて、大型バス「五一二七」號がま

つしぐらに走つて來ます。そして窓か

ら手を振つてゐるのは、少年車掌雄三

なのです。バスが止まるか止まらない

うちに雄三は、

「おくれてすまなかつた、さあみんな

乗つてくれよ」

と、聲をかけますと、慰問品をドツサ

リかゝへた子供達がドヤ／＼と乗り込

みました。

「みんな揃つたね」

「さあ出發オーライ」

と、雄三が聲をかけますと、大型バス「五一二七」號はガソリンの煙を土の上に投げ出して動き出しました。

「よかつたね、みんなの力でこんなに

うまくいつて」

「眞心が通じたのだよ」

「早く軍病院へ行きたいなあ」

「良夫君のお父さんがみたいなあ」

と、話してゐると、運轉してゐるおぢ

さんまでが、

「いやみんなの心がけには感心しまし

たよ、私もそれで今日一日奉仕します

よ、感心々々」

と、ほめてくれました。そして機械を

グイと押ますと、バスはすばらしい早

さで走りしました。

軍病院へ行くうれしさをのせて埃の

中に「五一二七」號の車體が見へなく

なつた時分バスの中では勇ましい軍歌

の合唱が窓の外まで流れてゐました。

はんぶ あんじゆん
本部員巡
錫だより

北海道を巡講して

佐 藤 賢 順

函 館

八月七日 函館は暴風雨であつた。津軽海峡は、碧いといふよりは黒い潮の、浪頭が白く泡立つて、雨が横なぐりに吹きつけてゐた。函館の機橋では澤山の出迎へ人達が雨に濡れてゐる。その中に船の上の中村先生と私とを見つけて帽子を振つてゐる人が二人あつた。稱名寺支部から出迎への鳥居正語君と簡井禮司君とであつた。鳥居君は

大正大學淨土學科を出て數年前より駒ヶ岳の北方の森といふ所の、教會所の主任をしてゐる働き手、簡井君は正大で一般佛教學を専攻してゐる學生、今、湯の川温泉へ歸省中であつた。船見町の高臺に聳ゆる大伽藍稱名寺へは午後二時半頃に着いた。住職小川隆誠師は豫てより本會の理事として祖德鐵師の聖業に協力して下さつてゐる方で、この支部には百人程の會員がある。案内は濡れなく出して

臨分宣傳して置いたのですが、この嵐では全く困りました、澤山集つて呉れ、ばよいがと心配してゐます、といふことであつた。全く生憎の暴風雨である。少憩の後三時から尾阪成運師の司會で講演を始める。この天候の中を、見渡したところ百人程の人達が集つてゐる。老若とりどりであつたが、この地方は念佛の信仰の厚い所なので、皆熱心に傾聴してゐた。私が本會の成立や事業や組

織に就いて一通りの説明をしてから、淨土教を信受するに大切な心持に就いて少し話した後、中村先生は熱烈な口調で興味深い警諭を交へて、淨土教の本旨を續々と説明された。講演後別室で座談會が催された。

座談會では飯田氏から「法身の報身佛とどう違ふか」といふ深刻な質問が出たり、辻氏からは「一度犯した罪は念佛によつて消えるものかどうか。行ふ時には善い事と信じて行つても、あとで時を経て考へてみて、それが悪かつたと思はれることが屢々あるが、どうしたらよいのか」といふやうな生活上の深い悩みを吐露せられ數項の質疑應答が行はれた。後で小川住職に

聞けば、兩氏とも熱心な求道者であるといふことであつた。兎に角「淨土」に深い厚意を寄せられてゐる人々に結縁して、意義のある半日を過したことは忘れ得ぬ喜びであつた。

江 差

八月八日 前日の颪風はすっかり晴れて、青い空に北海らしい冷い風が流れてゐる。七時三十三分發の江差行に乗る爲に、函館驛へ馳せつけた。筒井君が送つて呉れた他に、英泰憲君の顔が見えた。七年も會はなかつた懐しい顔である。英君が正大の宗教學科を出た當時、一しよにシユライエルマツヘルの講讀をやつた頃を思ひ出した。今度は英君に會へると思つて

ゐたのに、昨日は其の顔が見えなかつた。止むを得ぬ用事でどうしても來れなかつたといふ。皆に訣れて江差へ向つた。函館驛の風光が美しい。木古内から西北に走つて上ノ國驛を過ぎると日本海の眺望が開け、紺碧の海に白い鰯が幾つとなく群を爲して舞つてゐる。砂丘にはみそはぎやうまごやしの花が美しい。みそはぎは内地で見るとはずつとその紅紫色が鮮かのやうだ。十一時半頃江差に着いた。驛には「淨土歌壇」でおなじみの花田順往老師と二三の人々が出迎へて下さつた。今日の會場金剛寺へ行く自動車の中で、江差町は函館よりもずつと古く、松前藩當時に開けた所で、鰯漁の豊富な頃は百船

輻輳し、蝦夷唯一の檜山船檢所が置かれてあつた程、繁盛を極めたけれど、近年は潮流の工合か、鰯漁が全くななくなつて淋れた、といふやうな話を聞いた。戸數千六百。海岸沿ひに南北に延びた、往昔の股眼を思はせる古風な町である。

金剛寺は先年窪川旭丈僧正を聘して五重相傳會を勸修したさうで、今度の集りも八月八日から十日まで泊込みの、五重相傳會其儘の別時念佛會で、近在の農家からも澤山の人が身の廻りの品を持參で泊込んでゐた。多くは老年の婦人であるが、早曉から夜遅くまで、休息は食事の時間だけといふ熱心さで、禮拜と稱名を勵んでゐる。住職吉田英壽師の教化の努力が偲ばれ

る。

この日は中村先生と私とが午後一時間づつ講話をした。聴衆は百二十人程であつたが大部分が農村漁村の婦人達なので、中村先生は特に平易な説話と巧妙な譬喩で淨土信仰の秘奥を諄々と語られて多大の感銘を與へた。

夕食が済むと間もなく、町の青年團と女子青年團との團員が八十人程、其他に約三十人の聴衆が集つた。青年團も女子青年團も十五六から二十二三までの張切つた元氣のいゝ人達であつた。午後七時半、團長小路芳榮君の挨拶と司會とで講演が始まつた。私は時局下に於ける我が國の青年の持つべき信念は無我奉公の佛教信念でなければなら

ないことに就いて、私の所信を思ふまゝ吐露した。話すと共に、話が、弾力のあるゴム毬のやうにはね返つて来る氣がする。私語する人一人もなく熱心に聽いて來れる。中村先生は新東亞體制の時代に於ける青年の實踐生活に就いて得意のお話をされた。女子も多いので九時には解散といふことであつたのが、小路君からもう三十分延長して少しでも餘計お話が聞きたいと申し出られた程の熱心さであつた。聴衆は「淨土」を手にして名残惜しさに歸つた。

講演が済むと青年團の幹部の人達が居残つて會場の後片づけをした。奉仕行はかうした第一歩の實踐からである。後片づけが済むと小路君を初め富澤幸雄君、辻重次君、西海谷巖君の四人が茶菓子を持つて、私達どもの部屋を訪れた。そして今夜の會合の意義深かつたことや、事變下に於ける青年の緊張した心持などに就いて率直に話した。富澤君は小路の平井善慈氏へ小樽で在家支部を作つてゐる熱心な會員の場で、豫て中村先生が北海道を巡錫して江差へも立ち寄るといふ報せを受けて、待ち構えてゐたといふ。

小路君は佛教には宗派といふものが何故必要なのか、といふ青年らしい質問を出した。中村先生が日本佛教は宗派としてのみ佛教の理想を實現してきたこと、宗派が——而もはいり易い身に叶つた宗派が是非とも必要である所以を丁寧に答へたりした。ランプの焰が時々ポツポツとゆらめく。蛙が鳴いてゐる。話は何時果てるとも思へなかつたが、十一時半になつたので四君とも歸つて行つた。海邊では、いんざう（鷗に似た鳥）が切々とした聲で啼いてゐる。

八月九日 中村先生も私も共に午前一時から午後一時の講話。その間には前日のやうに禮拜と念佛。一回よりは二回、二回よりは三回と、會衆の人々とも段々親しくなつて、話しよくなつたが、然し講話が三時に終ると、江差から函館へ歸つて、今夜の夜行で北上する爲に、急いで出發の仕度にかゝらねばならなかつた。金剛寺の石段の下には、會衆が居竝んで送つてくれた。中村先生が「どうぞ皆さま、よくお念佛をなさつて下さい。また御縁があつたら御目にかけませう。」と訣れの挨拶をした。送る方も送られる方もしつとりとした心持である。

花田師と江差驛へ着くと、驛には男女青年團の幹部が數名、忙しい中を態々見送りに來てくれた。キチンと竝んで送つてくれる若い人々の姿が車窓から消えて行く時、何かしら込み上げてくる思がして、「青年は良いな」といふ考が胸をかすめた。函館驛ではまた英君が待つてゐてくれた。旭川行夜行の出来る迄の三時間は、ゆつくり話の出來た愉快な時間であつた。（その後の巡講記は本誌編輯部）

信仰相談 中村辨康

靈魂は死んでも残るか

(問)

靈魂は不滅と申し候が、果して人間の死後に魂は残るものに御座候哉。小生は生前の果が残るものと思ひ居り候へども如何なるものにや、承り度存じ候。

(新潟・上保・愛讀者)

(答)

本誌第五卷第五號即ち今年の五月の本欄「死後はあるかないか」を御覽下さい。その答は大體「死後も虚無ではない」即ち靈魂は滅せずと云ふ事を推理的に申し上げたのですが、それを御覽下されば大體御瞭解が出来るのではないかと存じます

然し尙ほそれを補充する意味で申し上げますと、一體私達は「たましひ」と云ふことを申して居りますけれども、それはもと「玉の火」の意味から來た言葉であつて、現實的には「燐光」のやうなものなどに名付けたものが段々轉化し、支那の「魂魄」の考へと一緒

になつて「こゝろのもと」または「いのちのもと」と云ふやうな意味になり更には「こゝろ」「精神」「きまへ」と云ふ意味にも使つて來たものであります。

また漢字の「魂」は陰陽二元論から來たもので、陽に屬する氣を「魂」と云ひ、陰に屬する氣を「魄」と云つて、陽から來た「魂」と陰から來た「魄」と一つになつて人間の精神が出来るのだが、人が死ぬと「魂」は陽に歸り「魄」は陰に歸るのだと云つて居ります、また「形に附する靈を魄となし、氣に附する神を魂となす」とも云つて、まづ人が生れて形が出来ると同時に「魄」が出來、續いて「魂」が出來て「生物」になるのだと云ふのですが「氣」とか「靈」とか「神」とか、または「陽」だの「陰」だのと云ふことそのものが既に難解であつて、實は何が何やら本

信仰上の御相談に廻します。御質問はハガキに住所氏名御明記の上、信仰相談係宛御送附のこと、誌上匿名は可。

當のことはサツパリ分つたものではありません。然しさう云ふ思想が日本へ渡つて來たので、恰度幸ひとしてかうした文字をあてたものですが、元と元と分らないものを分らないまゝに用ゐたものなのですから今以て何が何やら疑問のまゝで居る譯です。

また佛教でも密教などには「延命法」とか「招魂法」とか云ふものがあり、陰陽師にも「招魂續魄」の法などあつて愈々益々「魂」の考へが一般化した次第でもあります。

今の問題はそれが續いて行くのか行かないのかと云ふことなのですが、元來は佛教では「魂」と云ふことは云はないのです。無論佛典も漢譯されたものですから「魂神精識」とか「精神」または「精識」或は「精靈」とか「精魂」とか云ふやうな文字は用ゐて居るに居ますけれども、一般に考へて居るやうな不變なものとはして居りません。それはお説のやうに過去の行爲に依て色々に變化されるべきものとして居るのであります。

「行爲」は即ち「業」です。業には身口意の三業があり、その三業に各々善業惡業無記業の三があり、無記業とは「善とも云へず惡とも云へない行爲」のことを云ひます。またそれらは皆な「表業」と云つて表面にあらはれた行爲ですが「無表業」と云ふ表にあらはれない行爲もあるとされて居ります。ところが私達は常々「惡業」ばかりして居るものです。即ち「一人一日の中八億四千の念あり。念々の中の所作皆なこれ三塗の業なり」と云はれる如く「三塗の業」即ち食欲瞋恚愚痴の三に關係しないものは無いのですから、全く以て困つたものです。

それらが重なり重なり續り續つて段々力を増して行きます。坊さんが坊さんらしい恰好になり百姓が百姓らしい姿になるのがそれです。怒つてばかり居ると怒りっぽい顔になり泣いてばかり居ると泣きべそになるのがそれです。それが「業力」と云ふものです。ところが力は強い方へかたむくのが原則ですから、其色々ある業力の中でも最も強力なものが結果を生み出します。それが段々それからそれへそれからそれへと續續されて行く

ところから「精靈」即ち「たましひ」が續いて行くとして居るのです。

尤も「業」の現はれるには「順現業」「順次業」「順後業」と三通りあつて現在に結果するもの、次ぎの世に結果するもの、二世三世の後に結果を現はすものとあります。それは條件が具備するか否かに依て異なる譯です。隨て最も強い善業が作用する時は惡果が結實しない場合もあり得るのです。例へば如來の大願業力が働けば其強い力に引かれて惡果を封じて仕舞ふと云ふやうな場合です。

何れにせよ、私達はいろ／＼の行爲をなして居りますが、それがみな「個在觀念」の上になされて居るのです。そしてそれから抜け出ることがどうしても出来ないで居るのです。此個在觀念の結ばれて居るのが即ち「我」であり「魂」なのであります。それで過去の「我觀念」の上になしたところの「業」がいよいよますます「我」を固めて行き、いよいよますます惡業を續けて行つて茲に「不滅」の「魂」を作り上げて居るのです。そして色々苦しんだりもがいたり悲しんだりして行きます。之を「六道輪廻」とも云ひ「惡業苦」

の「業感縁起」とも申します。

此故に生前と云はず一切の行爲の集積が一つの「力」を結成して現在も未來も「私」そのものを「繼續」の中に押し流して行き私をして「不滅の苦」に追ひ込んで居るのですから、私達としては聖道の戒定を修して其「不滅」の對立した世界から脱出しなければならぬとする譯ですが、それが出来ないから親鸞上人でさへも「地獄一定」となげかれた譯でせう。

之に反して淨土門は私達が個在觀念に依て生きかはり死かはり「我」を結成しつゝ「不滅の靈魂」を好む好まぬに頓着なく續けて居らねばならぬのを、如來様と云ふ「大生命」の中にとけこませて「小我」をスツカリ解消せしむるのであります。「南無阿彌陀佛」の念佛は表現形式としては誠に單純であるやうに見えますが、その多年の結晶産物である「我」をとかして行く効果に於ては實に偉大なるものがあるのです。それは大宇宙を貫く「無量壽」と「無量光」との絶大なる「力」が働いて呉れるからです。

雙蓮仰運動ニユース

定本を期する

浄土宗讀本

三權威に依囑・銳意執筆中

在家、出家を問はず浄土教信仰に關する纏つた定本の出現は兼が

良忠寺支部の夏休みのつどひ

どひ

ね要望されてゐた處であつたが、本會では昨年中よりその編纂を意圖して種々計畫中であつたが、先頃京都佛敎専門學校教授前田聰瑞大正大學教授大野法道、本會理事長中村辨康三師の合著として出版することとなり、三師の打合せも終り目下銳意執筆中なので遅くも今年中には出版の運びとなる見込みで内容は勿論、體裁校正等にも嚴密を期して後世に残して恥しからぬ定本とする意氣込みである。

川崎市良忠寺支部では夏休みのつどひ會を八月六日より一週間開き、事變下兒童の宗教的信仰に基き徳性涵養につとめることを目的とし多數兒童の申込みを受けて盛會であつたが、最終日十三日にはみ魂まつり、護國英靈追悼會を催し時變下兒童の精神修養に資するところがあつた。



本部だより

◇巡錫本部員の中村佐藤南師八月六日出發、頗る元氣、各地での大歡迎に恐縮してゐるとの第一報入る。

◇前號に本會理事江藤滋英師の「中支とところ／＼」は大好評であつたが、見出しの執筆者名が英が徹英となつてゐる誤植に編輯子大恐縮、恐る／＼うかゞひを立てた處、何に、この字は良く間誤はれるんだよ」とあつさり片付けられてほつと一いき右の次第讀者方にも諒せられよ。

改組後の初理事會

七月廿八日午後三時より芝明照會館樓上にて本會改組以來初の理事會を開催、里見浄土宗執綱、中村理事長始め多數理事出席の下に組織問題事業方針を討議、更に別項の如き本會總裁役員等の決定を見て夕刻散會した。

陸海軍慰問浄土病院

寄附者芳名 七月十日より八月十日迄

拾圓也 東京教區城南組

榮壽寺

一圓也 岐阜縣中津町

原整重

二圓也 北海道瀧川町

運海寺

二圓也 東京芝區田村町

神田俊輔

二圓六十錢 神奈川縣茅ヶ崎町

爪生須

一圓也 鹿兒島市樋之口町

寺島景介

拾圓也 京都市左京區夷川通川

端東入ル秋月町

小林周子

五圓也 東京教區八王子組勝樂寺

茂田良賢

一圓二十錢 赤坂區青山南町

文屋文七

東北 北海道 巡錫の一行出發

時局下の思想修養に活躍

かねて本欄に發表しておいた本
部員東北北海道巡錫の一行本會
理事長中村辨康、主事佐藤賢順兩
師は八月六日午後七時上野發の急
行列車で巡錫の旅にのぼつた。

本部員、東京支部の諸氏の見送り
をうけて元氣で出發したが花巻支
部の講演會を振出しに北海道各地

を巡錫講演會、別時會、座談會
を通じて祖國宣揚、時局認識のた
めの根本信念について北海の同志
に訴へる。

裁斷講習會に

特別講話

芝罘支部長稻穂澤二氏は東京
洋服組合の役員として活躍されて
ゐるが、第廿一回洋服裁斷講習會
が芝罘小學校に開催されたのを
機會に本會理事長中村辨康師を依
頼して科外修養講座を開いた。八
月四日午後五時半より同講堂で中
村師の「職業と佛教修養」に就い
ての講話があり講習員役員等多數
の出席者に深い感銘を與へた。

(上掲寫眞は當日の講演會場)

S.S.S.

金のペン 亂賣に すぐ

金ペン 合スエ ！を



¥150以上

★ サエス・合金 萬年筆



信 仰 の 培 養 素

— 日常動行式解説 —

中 村 辨 康

(二二) 念 佛 稱 名 (如來を欣慕して)

南無阿彌陀佛 々々々々々々

觀無量壽經に曰く「善友告げて言く。汝、若し念ずる能はざれば、應に無量壽佛を稱すべしと。是の如く至心に聲をして絶えざらしめ、十念を具足して、南無阿彌陀佛と稱せしむ。佛名を稱するが故に、念々の中において、八十倍劫の生死の罪を除く。」とあり、また無量壽經には阿彌陀佛の四十八願を説き、第十八の願として「設、我、佛を得たらんに、十方の衆生、至心に信樂して我國に生ぜんと欲し、乃至十念せんに若し生ぜずんば正覺を取らじ」と念佛の依つて來るところを示し、また阿彌陀經には「若し善男子、

善女人あつて、阿彌陀佛を説くを聞いて、名號を執持すること、若しは一日若しは二日若しは三日若しは四日若しは五日若しは六日若しは七日、一心不亂なれば、その人命終の時に臨んで心顛倒せず、即ち阿彌陀佛の國に往生することを得」とある。是れ等の證文に依つて「南無阿彌陀佛」の稱名が正行中の正定業とせられるのである。

(和 譯)

阿彌陀佛に歸命し奉る

(意 譯)

大宇宙の根元でましまし且つ私達の心の親像でまします無量壽無量光のみ佛様に私の身と心とも一切を捧げておまかせ致します。どうぞ如來様よ。お救ひ下さい。そしてお護り下さい。

講 贊

私達は遂に行き着くところまで来た。

今は唯念佛するだけである。

理窟はいくら繰り返して居ても駄目である。感情がゲン／＼引き起されて念佛せずには居られないまでの衝動を感じ、我知らず合掌して

「南無阿彌陀佛、々々々々々々、々々々々々々」

と念佛が口を衝いで出て来るやうになつて、初めて本物になるのである。

其處には感謝もあるであらう。法悦もあるであらう。更にはもつとハッキリしたいと望む向上の念願もあるであらう。

兎に角、喜びやら、望みやら色々複雑した氣持が湧いて、今まで嘗て経験したことのない望みに満ちた微妙不可思議な宗教感情の中に浸つて居る自分自身を發見し得たことは、誠に天地何物にも替へ難い幸福をシミ／＼感ずるものである。

多くの人々は災難をのがれ幸福を得るのを目的として神佛へ誠をつくすのを信仰だと思つて居るやうであるが、それは遂に永久に握めぬ幸福を追つて行くところのものであつて、本當の誠でもなく本當の信心でもない。畢竟飯粒で鯛を釣らうとする利己主義と同一の心境でしかない。そんな手前勝手な誠があるものではない。

い。唯だ無反省のまゝにそれを誠だと思つて居るだけのものである。

本當の信仰は、魂の故郷を戀ひ求めて本當に死なない自分を發見せんとする意欲から出發するものである。

無論初めは死なない自分、本當の自分を求めると云ふやうなハッキリした氣持はないまでも、何となくあきたらない自分を感じて、もつとあきたる自分を得たいと云ふ氣持から信仰を求め初めるうち、だん／＼精神界のことが判つて來て何時しか本筋に入るのである。隨て其處には物質的な功利主義的なものはなく、精神的な純な希望があるのみだつたからこそ、自然に本當の信仰へ導かれるのである。

それは「様なきを様とす」とか「義なきを義とす」とか云はれて居るやうに、謂ゆる「法爾自然」に高められて來たものである。法然上人の求道が特別の動機から突然餘儀なくさせられたものではなく、自然に求道の志が熾烈となつたので、十八の歳に黒谷の觀空上人の室に投じた時、觀空上人から「法爾自然の聖」との理由から「法然」の名付けられたと云ふことは、やがてまた私達念佛者の上にも體驗さるべき求道の道程である。

かくて私達は今「求道」の時代を終へて「入信」の喜びの中に入つたのである。それは心から「念佛」が出来ることに依て證明されるのである。

世には「念佛」して居ながらも

「私は信仰に入つて居るでせうか」

と質わる人もある。之は「若存若亡」と云つて「あるやうでもないやうでもある」ところの、不安定な状態、確證し切れない状態なのであるが、人間の精神事實を一方付けて見やうとする正直さから來た心狀でもある。

私達は信仰に入つたからと云つて、直ちに聖者に變ずるものではない。凡夫はどこまでも凡夫である。元より煩惱具足の身で煩惱生活には馴れ切つて居るのである。だから色々劣悪な心も起るのであり、如來様の聖意に背く行爲もするのである。欲界に生を受けた身として五欲に捉はれ八風に譚弄され勝である。だからこそ「念佛」しては如來の慈光を仰ぐのでもあるが、それを入信しさへすれば直ぐ聖者になり切り、生活もスツカリ清まつて煩惱なき身となれる筈だと思ひちがふところから、さては「まだ本當の信仰になつて居ないのではあるまいか」との疑ひが起り、自信が持てなくなるのである。

然し乍ら信仰があるかないかは念佛して見て、本當に念佛されたか何うかで決せられることである。無論段々生活も淨化されては行くだらうけれども、謂ゆる「沙彌からすぐ長老にはなれぬ」譯で一足飛びに淨まつて行ける譯のものでもない。其處に修道生活の必要があり、また「時々別時を行へ」と云ふ訓へもあるので

ある。これ修行還轉勝な凡人の私達だからである。怠れば「百日の功を一晝に缺く」ことがないと保證は出來ないのである。

だから平生の信仰を養ふために時々「別時念佛」を行ふ必要もある譯である。

一體この「日常勤行式」の念佛なるものは「別時念佛」である。たとへ二十分でも三十分でも乃至は一時間でも二時間でも特に佛前で「おつとめ」をするのは「特別な時間」だからである。ところが多くの人はこの「おつとめ」は「別時」ではないと思つて居るらしいが、平生念佛の行住坐臥を間はないものと異つて、負しいながらも香華燈明を供へて佛前に端坐し威儀を調へての念佛は、例へば僅かの時間であるとは雖も「別時の作法」であることを云ふまでもないのである。

別時念佛に就ては法然上人も次ぎのやうに懇ろにすゝめられて居る。

「時々別時の念佛を修して心をも身をもはげまし調へ進むべきなり。日々に六萬遍を申せば七萬遍を唱ればとて、唯だ在るもいはれたる事にてはあれども、人の心さまはいたく目も馴れ耳も馴れぬれば、いそいそと進む心さへなく、明け暮れ心忙かしき様にてのみ疎略になりゆくなり。其心をためなほさん料に時々別時の念佛はすべきなり。然れば善導和尚も懇ろに勧めたまひ恵心の往生要集にもすゝめさせたまひたるなり。道場をも引き

つくろひ華香をもまいらせんこと殊に力の堪んに隨ひて莊りま
いらせて身をもことに淨めて道場に入りて或は三時或は六時な
どに念佛すべし。若し同行などあまた有らん時は、かはるゝ
入りて不斷念佛にも修すべし。かやうの事は各々ことさらに隨
ひてはからふべし。おのゝ差して合はざらん時をはからひて
七日の別時を常に修すべし。ゆめゝする事ども云ふ者にす
かされて不善の心あるべからず」と、

また忍徴上人の「別時念佛三昧法議註」に、知恩院の順眞大僧
正が序文を書いて居られるが其中に

「夫れ別時行儀の期するところ優に三昧を得て佛陀の境を感ず
るに在り。其軌や嚴にして修し難きに似たりと雖も、淨戒を以
て成ずるに非ず、禪定を以て得るにも非ず、智慧を以て求むる
にも非ず、直信直行一心不亂なる時は則ち感應道受して、月の
水に印するが如くなる、亦たいづくんぞ疑はん。何んぞ自棄し
て之を修する事を憚らんや。而も世上悠々の徒、念佛に三種
の儀則あることを顧みず、四修の中に恭敬修あることを思は
ず、妄に懈怠放縱妄念亂想を認めて以て宗教となす。これ口に
藉るに淨土易行を以てして自ら障へ他を障ざる者、寔に悲しむ
べし。上人別に言ふことあり。曰く三昧業成を除いて其餘の稀
望は畢竟妄想のみ。亦た何をか求めん。いかにぞ營々として徒
らに一生を苦むやと。誠なるかな。吾黨の行者よろしく肝に銘

すべし」と

このやうに「別時念佛」は信仰の培養にもなり信仰の發展にも
なり信仰の確證にもなつて實際上の効果をもたらすものである。
然しこれらは主として短い時間での「おつとめ」の場合でなく
一日乃至七日などの長い時間の特別の行儀を指して居ることでは
あるが、さればと云つて此の短時間の「おつとめ」の念佛を「別
時念佛」でないとすることは出来ない。

元來念佛に三種の行儀のあることは善導大師の「觀念法門」と
云ふ書物の中にあるもので、第一の尋常行儀は平生の念佛で第三
の臨終行儀に對した言葉である、第二の別時は平生の長時に對し
た言葉である。そして其平生は臨終に役立ち別時は平生の信仰に
役立つものである。と云ふのは「別時」の念佛に依て益々信仰
仰が固められて「平生」の念佛が何時も新鮮な氣持で相續され、
その平生の念佛相續に依て如來慈光裡中の生活が喜ばれると共に、
臨終もまた如來の來迎護念に依て正念往生が出来るからであ
る。だから何は兎もあれ時々「別時念佛」を行ふ必要があるの
であるが、夫々家業などに追はれて三日とか五日とか一週間とか
の特別な時間を持つ事が出来ないから、せめて朝晩の短い時間を
「別時」として如法につとめることはもつともよい方法である。
だから此「日常勤行式」に依るお念佛はそのつもりで一心に眞
心こめて唱名すべきである。

善導大師は「觀念法門」の中に此別時念佛の方法を十二箇條に分けて説かれて居るが、其最も急所とするところは

「東レ心相續專心念三阿彌陀佛一心與聲相續」

「但知三合掌念佛念念作三見佛想。佛言想三念阿彌陀佛眞金色身光明徹照端正無比二在二心眼前」の二箇條であらう。

然かも其「見佛想」とは忍微上人に依れば「刹那の間も餘事を念ぜず、一すちに佛の尊容ばかりを心に浮べよとなり。之は特に大切なればわきて釋尊の金言を引きたまへり。佛言等とは釋迦如來般舟三昧經の中に説きたまへる文なり。文の意は、合掌念佛する間は心に萬事を忘れて正眞の彌陀如來金色の尊容にて光明内外に透りてその端正きこと類もなき御有様なるが我が心の目の前にましますぞと見るが如くに思ふべきなり。かくの如く思ひ取りて稱名の功つもりぬれば何時となく罪消えて餘念なくたゞ阿彌陀佛に向ひ奉る心ばかりになりたる時、三昧を成就して正しく佛を拜見するなり」と説明して居られる。

また妄念の起ることに關しては

「凡夫の習ひ如何にも妄念を忘るゝことはなり難しと思ふに、それは妄念を忘れて後に佛を念ぜよと云はゞ如何にも及び難きことなれども、妄念には取りあはずひたすら佛の尊容ばかり心を係けて高聲に念佛すれば妄念自然と起らぬなり。天を思へば地を忘れ右を思へば左を忘るゝ心なれば、佛をだに思ふたれば

妄念はおのづから止むなり。妄念とは昏散の心なり。業障深重なるが故にやゝもすれば妄念雜起すれども、頻に念佛して大慚愧を生ずればおのづからうすくなるぞと思ふべし。妄念のやまぬにつけては彌々慚愧して罪障の程を悔ひぬれば專心かならず發るぞかし」と親切に云はれて居るが、之は實に私達もまた體驗されるころのものである。

この「尊容を心にかける」とことと「妄念の起るのをくやむよりも妄念を取合はぬ心構へ」との二つは念佛する者に取つては大事な大事な急所であつて此二つさへ心掛ければ、何時しか三昧成就の時節も到來するものである。然しそれは我が力に依て「定心」になるのではなく如來様の三昧定力に引き立てられて成るのであるから、些かも我が念佛に「三昧成就」を望んではならないのである。若し假りにも之れを望む心が起るならば、それは何時しか自力心になつたのであり「有所得心」になつたのであるから念佛ではなくなるのである。成る成らぬは一切如來様まかせで、こちらとしては唯だひたすら如來様に南無し歸命するだけでよい。

私達は元より妄念の持主であり散亂動搖の心を持つて居るのであるから、容易に妄念雜念から解放されることは出来ない。然も、實際上に私達は熱心が足りないから注意が散漫し用心が怠るのである。そして大體に於て妄念雜念は念佛と念佛との間にはさまつて湧いて來るもので「南無阿彌陀佛」と唱へ乍ら如來様

に南無しました「南無阿彌陀佛」と唱へながら如來様に南無して續けて行くうち、何時しか其南無の氣持がぬけて來て、雜念が湧き妄念が起るのである。

此れ故に「南無阿彌陀佛、々々々々々」と續けるとき何時も「南無・阿彌陀佛」と「南無」を特に意識するやうに心を用ゐ、そして「阿彌陀佛」と天地に滿つる大靈に恭敬信順の念を運ぶやうに心掛けて行くべきである。それでも兎もすれば雜念が湧いて來るから、湧いて來た度に「南無」と意識して其雜念を拂ふやうにする。それは恰かも羣衆を分けて寫つて居る月影を追ひ求めるやうなものかも知れない。生ひ茂る草を氣にせず、月影を、月影をと求めて行く其氣持と同じやうに、たとへ雜念妄念むらがり起るとも、その雜念妄念を踏み分けて正念の「南無」を求めて行けば、おのづから心が澄み心が清まつて來るものである。

かうした心の用ゐ方は人に依つて異なるであらう。徳本上人は「南無阿彌陀佛の一聲の間に三度程は心を用ひよ」と云つて居られる。今私の云つた方法は無論兒童に類する幼稚なものであるかも知れないけれども、私は何時もそんな拙い事をして居ても相當その効を認めるので、たゞ初心の方々への御參考にもならぼとの老婆心から、白狀に及んだ次第である。

熱心な求道心さへあれば、そんな事は寧ろいらぬものである。或はそんな事をするから自力的な氣持が抜け切れないのだと云ふ

非難もあるかも知れない。また一方にはそれと反對に、念佛は安樂道でそんな小刀細工までする必要はないと非難する人もあるかも知れない。それは其人其人のことで、さう思ふ人にはそれだけの理由があるのであらうが、自力とか他力とか云ふことは其人其人の心境の如何に依つて決せられることで、唯だ外部的な形式を以て批評すべきものではない。一念でも自力の念佛があり、多念でも他力にすがる念佛があり外形だけではきめられないことである。また「小刀細工」と思ふ人は大機な心の持主で其人にはさうした用心は要らぬのであらうが、多くの人々には複雑した心の動きがあり散亂し易いから、中々正念を續けることが困難である。十聲や十五聲位な簡單な念佛にしても正念の持續が出来るけれども、三十分一時間と云ふやうなことになる、中々さう云ふ譯には行かない。そこが平生の念佛と別時の念佛との相違でもある。だから別時の時にさう云ふ訓練をして置けば平生の仕事しながらの時でも案外具合よく心を勞せずして正念の持續される効果があるものである。況して機根は萬差であつて強ちに自分によいから他の人にもよいとは云へず、自分に必要ないから他の人にも不必要だとはきめられないのである。

要は本氣で念佛することである。

之が出來れば何も敢へて多言を費す必要はない。

何れにせよ。信仰だつて生き物であるから、何時も同じところ

に踏み止まつて居ることではない。年と共に文化も進み理智的な培養を受けて居るのに、信仰だけは入信當時の幼稚園に居てよいと云ふ理窟はない。年と共に一般の智識が進むのであるから信仰もまたこれにおくれぬやうに、愈々益々太らせなくてはならぬ。迷信だつてまだ信仰的に幼稚な人や未開人にはそれが正信なのである。文明人から見ても初めて迷信と批判されるのである。

此故に念佛の信仰も入信時代のまゝでよい事はない。ことに入信時代は感情が高潮して居るけれども、時間がたつに従つて段々静まるから、それが二年三年と過ぎると、そのまゝでは物足らなさを感ぜ初めないも限らない。だから信仰に入つた人ほど信仰の話しを聞きたがるのである。つまり自分の信仰をもつと太らしたいからである。

ところが聞くばかりで念佛の方がお留守になると頭でつかちになつて理窟ばかりこねたくなる。それではやはり片端である。

茲にどうしても信心と念佛とが兩々相待て信仰を健實に太らせなくてはならぬ理由があるのである。

此意味に於て特別な別時念佛でないまでも少くとも朝晩の「おつとめ」の念佛唱名はなくてはならぬ大切なものである。

何はともあれ私達は今ま念佛することに依て法悦の中に居るものである。然かも此の簡単な「日常勤行式」に依て兎にも角にも茲まで導かれて來たことは、寔に嬉しい限りである。しかのみな

らず、今後の信仰増進の方法まで指示されて居るのである。實に此「勤行式」作者の用意周到な親切さには驚かされる。何と云ふ人が編まれたものやら分らないけれども、實に多年實踐の結晶であることに相違ない。

これからあとの「勤行式」は私達にまた何を示めして呉れるであらう。想像するだに誠に楽しみである。

(字 解)

南無——「歸命」と譯す。「いのちをかへす」または「いのちにかへる」とも讀める。善導大師は「發願回向」の義とも云はれた。また「南無」に救我と度我との二義ありと云ふ。阿彌陀——「無量」と譯す。一切が無量無限である意味である。別けても「命」と「光」とが人間に取つて大切であるから「無量壽」または「無量光」とも云ふのである。

佛——委しくは佛陀で「覺者」と譯す。覺はさとり、おぼえる、めざめるなど和訓するが、それらが皆々含まれて居ると見てもよいであらう。一般に覺者とは「自覺覺他覺行究藏せる者」と説明される。

尚ほ此の念佛に就ては云ひ足りないことだらけであるけれども、紙數がのびてしまつたので今度はこの位で擲筆せざるを得なかつたのは讀者に對して誠に相済まぬ次第である。幾重にも御懺察を御願ひする次第である。

編輯後記

◇まだ八月も中ばと云ふにすっかり秋になつてしまひました。空も高く影も深くなりました。

◇子供達は夏のあまりに早く去つて行きさうなのを寂しがるでせうが、私共には有難い時候です。暑さ寒さに苦情は云はれない時局柄ですが、やはり仕事をするには少しひやりとした風が吹いた方がよろしい。

◇北海道巡錫の本部員、中村理事長佐藤理事の兩師は土用の最中に東京を立つて、秋風に送られて、この廿日頃に歸京する豫定です。本誌には早くもその第一報を得て掲載いたしました。相當に目覺しい活躍をしてゐるやうで嬉しい限りです。遙かに聲援を送つております。讀者方にもよろしく御

應援下さるやう。

◇今月は大陸だよりを澤山のせました。いづれも淨宗の重鎮で宗教家独自の大陸觀をうかゞふことが出來ます。中にも服部覺善師は親しく第一線まで慰問行をされ、あまり人の行かぬ廬山を視察されたので、それを詳細に描かれた「廬山遊記」は得難い讀物と存じます。來月も續いて執筆される筈。

◇本誌に始めて執筆された三木武夫氏は満三十歳で代議士となられた青年議員、「人間漫語」の卓抜な文章はたゞ代議士ではありません。

◇吉田絃二郎氏の「阪根翁のこと」はその文章はもとより、内容に於いて益々味の深いものとなりました。これまた本誌獨特ものであります。

◇活動の秋、編輯子共も一層馬力をかけませう。時局下皆様の御修養、御奮闘を御祈りします。(道)

◇本會出版物の御注文は振替郵便が御便利です。振替口座番號は東京八二一八七番

◇御注文の場合は種類、部數、代價を楷書で明瞭に御書き下さいますやう。尚送料をお忘れなき様願ひします。

◇勝手乍ら代金引換は一切お断り申上ります。

◇その他お問合せは往復はがきかまたは返信封同封で、御願ひします。

◇會員で御住所御變更の方は現住所と共に前住所をも御明記の上御通知下さい。

◇本誌掲載の廣告は一切左の店で取扱つてをりますから廣告掲載御希望の向は直接その方へ御問合せ願ひます。

本誌廣告一手取扱

株式 正路喜社

東京市京橋區銀座西七丁目
電話代表銀座 五七六六

淨土 九月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和十四年八月三十日印刷納本
昭和十四年九月一日發行

(定價十二錢)

編輯兼 眞野 正順
發行人

印刷人 赤尾 光雄

東京市牛込區市谷加賀町二ノ二
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人續仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部定價金十二錢

(送料五厘)

會費 金一圓二十錢

一ケ年 (送料不要)

法然上人鑽仰會刊行圖書

東京市芝區芝公園明照會館
振替口座東京八二一八七番

中村辨康著

(四六版一三〇頁總ルビ付)

法然上人の信仰生活

定價三十錢
送料六錢

中村辨康著

(四六版八〇頁總ルビ付)

信仰讀本

定價二十錢
送料三錢

藤井實應編

(增刷出來)

菊半截一四四頁
總ルビ付

法然上人法語抄

定價三十錢
送料六錢

佐藤春夫著

特製ノート型、天金
十二ガ總ルビ、三〇〇頁

法然上人
別傳 掬水譚

定價四圓五十錢
送料二十二錢

中村辨康著

(四六版七〇頁總ルビ付)

講話一枚起請文

定價十錢
送料三錢

大野法道著

(四六版六〇頁總ルビ付)

法然上人

定價十五錢
送料三錢

中里介山著

(三六版二五〇頁クロース裝)

法然上人傳

定價六十錢
送料六錢

佐藤春夫・吉田絃二郎・岡本かの子
倉田百三・都芳隨園著

(增刷出來)

我が信仰

(四六版總ルビ付)
定價六錢
送料三錢

法然上人鑽仰會編

(菊版一一〇頁總ルビ付)

念佛讀本

定價二十錢
送料六錢

昭和十年五月廿日第三郵便物認可
昭和十四年八月廿日印刷納本

(毎月一回一日發行)
昭和十四年九月一日發行

淨

土 第五卷 第九號

定價金十二錢(送料五厘)
滿鮮臺灣金十三錢
外地定價